No. 13

平成5年度

# 帰国研修員フォローアップチーム報告書

■ 日本語専修コース ■

平成5年12月

国際協力事業団
沖縄国際センター

沖縄セ
JR
93－5

国際協力事業団
27009

JICA LIBRARY
1116975[2]

# はじめに

この報告書は国際協力事業団が実施した集団研修に参加した研修員に対するフォローアップ事業の一環として、帰国研修員のインタビュー及び所属機関等の訪問を通じて、現地で彼らが直面する諸問題及びニーズを明らかにし、適切な指導ができるよう、平成５年９月２２日から１０月５日までの１４日間、フィリピン及びインドネシア２か国に派遣した調査チームの業務報告書です。

本報告書により、当該分野における各国の実状、帰国研修員の活動状況、帰国研修員が抱えている諸問題及び研修にかかる要望事項等について関係各位のさらに深いご理解をいただき、今後の研修コースの改善に資すれば幸いです。

なお、本件実施のためにご協力を賜った外務省、（財）日本国際協力センター並びに現地において数々のご指導とご協力を賜った在外公館及び関係機関の皆様に深甚なる謝意を表する次第です。

平成５年１２月

国際協力事業団
沖縄国際センター
所長　松本宣彦

# 〔フィリピン〕

フィリピン帰国研修員との面接風景

左から　ルル、二人おいて　ラモン、

二人おいて　プリシラ

グレン、ルル、ラモン、

一人おいて　プリシラ

フィリピンＪＩＣＡ事務所を表敬訪問

橋本明彦所長と

フィリピン貿易研修センターにて

海外青年協力隊員・猪熊由里子さん

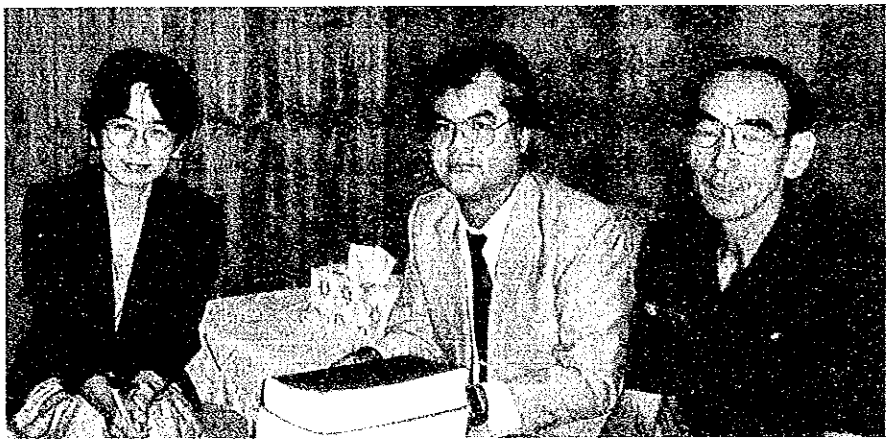
（日本語講師）と面談

# 〔インドネシア〕

工業省国際協力局

帰国研修員

左から　チュ、リリス、ムニール



労働省セベスト（職業訓練向上計画）プロジェクトにて

ＪＩＣＡ派遣専門家（チームリーダー）

内海幸雄さんと

帰国研修員の面談風景（インドネシアＪＩＣＡ事務所にて）

左から　イリアナ、ユナニ、エレン、エディ、エスプリアント、イカ、アミ、インダルティ

農業省作物保護局にて

帰国研修員　左から　エレン、一人おいて　イラ、ヤニ、ウタルミ、ジョコプリオノ、一人おいて　シスワント

# 目　次

はじめに
写真
目次
I　ファローアップ調査の概要

1．1　調査団派遣の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1．2　調査の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1．3　派遣国・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
1．4　調査団の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
1．5　調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
1．6　調査日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
1．7　主要面談者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
1．8　帰国研修員・調査インタビュー参加者リスト・・・・・・・・ 8

II．帰国研修員の調査分析・集計及び結果

2．1　日本語研修と仕事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
2．2　日本語研修に関して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
2．3　現在の日本語の使用状況・・・・・・・・・・・・・・・・・２４
2．4　再研修に関して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０
2．5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３

III．訪問機関先での調査・分析集計及び結果

3．1　フィリピン　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５
3．2　インドネシア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
3．3　フィリピンとインドネシアの調査結果概要の比較・・・・・４６
3．4　インドネシア各省における比較・・・・・・・・・・・・・４９
3．5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５２

IV．調査結果のまとめと提言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５５

4．1　帰国研修員追跡調査及び研修効果の調査・・・・・・・・・５５
4．2　所属機関における調査・・・・・・・・・・・・・・・・・５５
4．3　再研修の要望調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５６
4．4　背景調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５７
4．5　問題点及び今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・５７

V．資料

資料①　①帰国研修員リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５９
資料②　②研修員勤務先リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・６４
資料③　帰国研修員へのアンケート・・・・・・・・・・・・・・・６６
資料④　研修員へのインタビュー・・・・・・・・・・・・・・・・７２
資料⑤　訪問機関先でのインタビュー・・・・・・・・・・・・・・７４
資料⑥　研修員へのインタビュー調査結果・・・・・・・・・・・・７７
資料⑦　訪問機関先での調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・７９
資料⑧　収集資料リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８３

# Ⅰ．ファローアップ調査の概要

# 1．ファローアップ調査の概要

## 1．1　調査団派遣の経緯

第一回目の要望・背景調査時点から５年経過した１９９３年の現在、日本語専修コースの実施状況はかなり異なったものに変化してきた。技術部門からの応募者と窓口業務担当部門からの応募者の応募比率に変化が生じ、ＡＢ両コースに混在するようになって来た。また技術移転関係省庁以外の分野からの応募者の受入れもその変化の一端にあげられ、今後の日本語専修コースのレベル及び内容の検討、及び対象者の変化に対応するためにも要望の変化の実態を把握する必要性が高まってきた。

日本語研修の内容に関しては、現在使用中の当事業団編纂のテキストは主に日本での技術研修を前提としての言語運用を中心に構成されているので、帰国後、各自の国で即運用が期待される研修員のニーズに答えるには充分ではない。それを補う意味でも当センターの日本語室では、テキストの学習に加えて、帰国後必要とされる専門分野別の日本語学習もカリキュラムに折り込んで指導に当たってきた。しかし、今後更に現地での実態に見合う内容のカリキュラムの検討が望まれ、更に一層多様化が予想される現地でのニーズに適合したカリキュラムの検討が必要となってきた。

ＪＩＣＡの技術移転を更に円滑に行うためには、初級レベルの研修員を受け入れ基礎的な日本語能力を有する人材を養成することは極めて重要である。と同時に、更に能力の高い人材を養成し、即戦力となる人材を養成することも重要である。それには、基礎能力を既に有する帰国研修員の言語能力の拡大を図り研修効果を更に高めることがより現実的であると考えられる。従って帰国研修員の再研修の必要性・要望及び可能性を調査・検討し今後の日本語研修のあり方をもう一度見直してみる必要性が高まってきた。

上記の事情から再調査の必要性が高まり調査団派遣の運びとなり、１９９３年９月２２日から１０月５日までの約２週間、フィリピン及びインドネシアにて調査を実施した。

## 1．2調査の目的

①帰国研修員追跡調査及び研修効果の調査

帰国研修員の日本語の使用状況、継続学習の状況及び問題点、現在の日本語運用能力に関する調査をアンケート・面談等によって実施し、今後のコースデザイン・及び指導の参考にすることとした。

②所属機関における言語場面の調査

現地で必要とされるＪＳＰ(Japanese for Specific Purposes/専門分野別の日本語）の詳細な内容を調査し、今後のカリキュラムを現地のニーズ・多様化したニーズに応えるものにするため帰国研修員の上司や日本人専門家にアンケート調査及び面談調査を行った。

③再研修の要望調査

当センターでの研修成果の維持、補足、及び発展を図るために再研修ニーズの要望、その具体的内容などを帰国研修員及びその所属機関の上司との面談により調査した。

④背景調査：現地の日本語教育事情についての調査

現地の主要な日本語教育機関関係者や国際交流基金の日本語教育専門家等に面談調査を行い、関係資料を収集し、現地における日本語教育の実態を調査した。

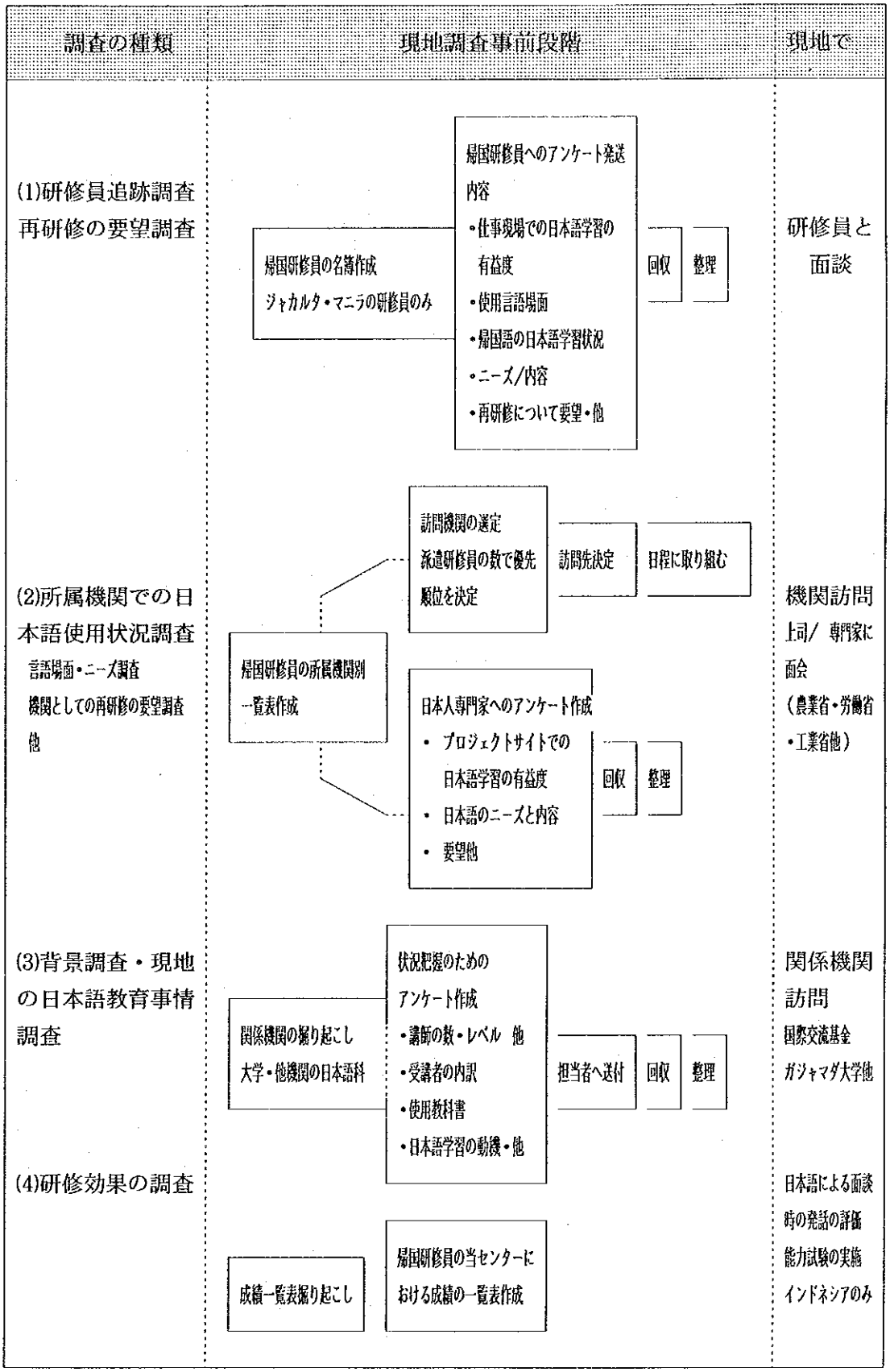
## 1．3　派遣国

フィリピン、インドネシア

## 1．4　調査団の構成

| | | | |
|---|---|---|---|
| (1) | 総括・団長 | 池　城　直 | （沖縄国際センター、研修課長代理） |
| (2) | 調査団員 | 大　城　朋　子 | （　〃　、日本語研修室講師） |
| (3) | 調査団員 | 祖　慶　壽　子 | （　〃　、　〃　講師） |

## 1．5　調査方法


調査の種類
現地調査事前段階
現地で
(1)研修員追跡調査
再研修の要望調査
帰国研修員の名簿作成
ジャカルタ・マニラの研修員のみ
帰国研修員へのアンケート発送
内容
・仕事現場での日本語学習の有益度
・使用言語場面
・帰国語の日本語学習状況
・ニーズ/内容
・再研修について要望・他
回収
整理
研修員と面談
(2)所属機関での日本語使用状況調査
言語場面・ニーズ調査
機関としての再研修の要望調査
他
帰国研修員の所属機関別一覧表作成
訪問機関の選定
派遣研修員の数で優先順位を決定
訪問先決定
日程に取り組む
日本人専門家へのアンケート作成
・プロジェクトサイトでの日本語学習の有益度
・日本語のニーズと内容
・要望他
回収
整理
機関訪問
上司/ 専門家に面会
（農業省・労働省・工業省他）
(3)背景調査・現地の日本語教育事情調査
関係機関の掘り起こし
大学・他機関の日本語科
状況把握のためのアンケート作成
・講師の数・レベル　他
・受講者の内訳
・使用教科書
・日本語学習の動機・他
担当者へ送付
回収
整理
関係機関訪問
国際交流基金
ガジャマダ大学他
(4)研修効果の調査
成績一覧表掘り起こし
帰国研修員の当センターにおける成績の一覧表作成
日本語による面談時の発話の評価
能力試験の実施
インドネシアのみ

# 1．6 調査日程表

| 国 | 月 | 日 | 曜日 | AM/PM | 主要調査日程 |
|---|---|---|---|---|---|
| フィリピン | 9 | 22 | 水 | 11:30<br>17:40 | 沖縄発<br>フィリピン着 |
| | | 23 | 木 | 9:00<br>10:30<br>14:00<br>18:00 | 国家経済企画庁技術援助課上級奨学金支給課訪問<br>フィリピン貿易研修センター訪問<br>帰国研修員との面談<br>帰国研修員との懇談会 |
| | | 24 | 金 | 9:00<br>10:00<br>13:00<br>16:00 | ＪＩＣＡフィリピン事務所訪問<br>在フィリピン日本国大使館訪問<br>外務省外務研修所訪問<br>在フィリピン日本国大使館広報文化センター訪問 |
| | | 25 | 土 | | 資料整理，打ち合わせ |
| | | 26 | 日 | 18:30<br>21:15 | フィリピン発<br>インドネシア着 |
| インドネシア | | 27 | 月 | 10:00 | ＪＩＣＡインドネシア事務所表敬打ち合わせ<br>工業省国際協力局訪問 |
| | | 28 | 火 | 9:30<br>11:00<br>14:00 | 農業省作物保護局訪問<br>農業省作物総局訪問<br>帰国研修員との面談 |
| | | 29 | 水 | 9:30<br>11:00<br>14:00<br>18:00 | 外務省訪問<br>内閣大臣官房局訪問<br>帰国研修員との面談<br>帰国研修員との懇談会 |
| | | 30 | 木 | 10:00 | 教育文化省訪問<br>職業訓練校訪問（セベストプロジェクト） |
| | １０ | 1 | 金 | 10:00<br>18:00<br>19:05 | 国際交流基金　ジャカルタ日本語センター訪問<br>ジャカルタ発<br>ジョグジャカルタ着 |
| | | 2 | 土 | 9:00 | ガジャマダ大学日本語学科 |
| | | 3 | 日 | | 資料整理，打ち合わせ |
| | | 4 | 月 | 7:55<br>8:55<br>8:55<br>10:30<br>22:00 | ジョグジャカルタ発<br>ジャカルタ着<br>ＪＩＣＡ事務所にて調査の報告<br>インドネシア発<br>香港着 |
| | | 5 | 火 | 13:55<br>17:10 | 香港発<br>沖縄着 |

# 1.7 主要面談者

1. フィリピン国

フィリピン側

① 国家経済企画庁（NEDA）
( National Economic and Development Authority)

| | |
|---|---|
| Ms. Aurora T. Collanties | Desk officer |

② フィリピン貿易研修センター
(Philippine Trade Training Center)

| | |
|---|---|
| Ms. Angelina V. Angeles | Executive Director |
| Ms. Mary Geraldine C. Naraja | Desk officer |
| | Foreign Service Institute |

③ 帰国研修員

| | |
|---|---|
| Ms. Annie E. Geron　他5人 | 労働省他 |

日本側

④ JICA事務所

| | |
|---|---|
| 橋本　明彦 | 所長 |
| 町田　哲 | 次長 |
| 柏谷　亮 | 職員 |
| 小林　伸行 | 職員 |

⑤ 日本大使館

| | |
|---|---|
| 長谷川　金二 | 一等書記官 |

⑥ 日本大使館広報文化センター

| | |
|---|---|
| 早坂　豊詮 | 一等書記官 |

⑦ 海外青年協力隊

| | |
|---|---|
| 猪熊由里子 | 日本語教師 |
| 吉村　卓 | 日本語教師 |

2. インドネシア国

インドネシア側

① 工業省国際関係

(Bureau for International relations, Ministry of Industry)

| | |
|---|---|
| Ms. Aisjah Taufic | Head |
| Mr. Danus Sidik | Head, Division of Bilateral Cooperation |

② 農業省作物保護課

(Food Crop Protection, Ministry of Agriculture)

| | |
|---|---|
| Mr. Muhamad Satta Wigenasantana | Director |
| Mr. Hidayat Gandaatmadija | Directorate General<br>Bureau of Foreign cooperation |

③ 外務省

(Department of Foreign Affaires)

| | |
|---|---|
| Mr. Herry Harjono | Director of Technical Cooperation & Economic Services |

④ 内閣大臣官房

(Cabinet Secretariat)

| | |
|---|---|
| Mr. Husen Adiwisastra | Head of Bilateral Cooperation Division<br>Bureau for Technical Cooperation |

⑤ 教育文化省

(Department of Education and Culture)

| | |
|---|---|
| Mr. Mohamad Afieq | Head of Bureau for Intenational cooperation |
| Mr. Mohamad Kodrat | Head<br>Division of America and Asia<br>Bureau for International Cooperation |

⑥ 職業訓練校

(Center for Vocational and Extention)

| | |
|---|---|
| Mr. Nahesson N. Tarigan | Principal |

⑦ ガジャマダ大学

(Gajah Mada University)

| | |
|---|---|
| Mr. Djoko Surjo | Dean<br>Faculty of Letters |
| Mr. E. Suherman | Lecturer<br>Japanese language<br>Faculty of Letters<br>Gajah Mada University |

⑧ 帰国研修員

| | |
|---|---|
| Mr. Eddie Pradjanto | |
| 他１９人 | 労働省他 |

日本側

① JICA事務所

| | |
|---|---|
| 熊谷晃 | 次長 |
| 斉藤直樹 | 次長 |
| 椎名のり子 | 職員 |

② JICA派遣専門家

| | |
|---|---|
| 内海　幸雄 | Team leader<br>Service Training(CEVEST) |
| 大澤　慶幸 | 農業省官房計画局アドバイザー |

③ 国際交流基金ジャカルタ日本語センター

| | |
|---|---|
| 清水　基久 | 所長 |

④ ガジャマダ大学日本語学科

| | |
|---|---|
| 百瀬　侑子 | 日本語講師 |
| 桑原かなえ | 日本語講師 |

# 1．8 帰国研修員 調査インタビュー 参加者リスト

| フィリピン国 | | 職場 | コース名 |
|---|---|---|---|
| 1 | Ms. Annie E. Geron | 労働省 | 昭和６０年A |
| 2 | Ms. Priscilla S. Reyes | 運輸通信省研修課 | 昭和６０年B |
| 3 | Mr. Ramon Ynares Reyes | 国家経済企画庁 | 昭和６１年B |
| 4 | Ms. Lourdes P. Pernes | 投資庁 | 昭和６２年B |
| 5 | Mr. Glenn Fortu Corpin | 外務省 | 平成　４年B |

| インドネシア国 | | 職場 | コース名 |
|---|---|---|---|
| 1 | Mr. Suprijad Danu Suwignjo | 労働省 | 昭和６０年Aコース |
| 2 | Ms. Cahyaniati | 農業省作物保護課 | 昭和６０年Bコース |
| 3 | Mr. Eddie Pradjanto | 労働省 | 昭和61年Aコース |
| 4 | Ms. Sri Indarti | 労働省 | 〃 |
| 5 | Ms. Utarmi | 農業省作物部殺虫課 | 昭和62年Aコース |
| 6 | Mr. Andy Jaya Dermawan | 農業省作物総局 | 昭和62年Bコース |
| 7 | Ms. Ellen Elvinardewi | 農業省作物保護局農業部評価課 | 昭和62年Bコース |
| 8 | Ms. Kartika | 労働省広報局２国間協力 | 昭和63年Aコース |
| 9 | Mr. Edi Tugiono | セベスト，職業訓練校 | 昭和63年Aコース |
| 10 | Mr. Dadeng Gunawan | 農業省作物総局 | 昭和63年Bコース |
| 11 | Mr. Abdul Munir Oesman | 工業省国際協力部 | 平成元年Aコース |
| 12 | Ms. Yunani | 農業省　プロトコール | 平成元年Bコース |
| 13 | Ms. Ratih Dewanti | 教育文化省 | 平成２年Aコース |
| 14 | Ms. Iriana Trimurty | 貿易省 | 平成２年Aコース |
| 15 | Mr. Riris Marhadi | 工業省国際協力部 | 平成２年Aコース |
| 16 | Mr. Arie Mustafa | 内閣大臣官房 | 平成２年Bコース |
| 17 | Ms. Dinariani<br>Dwi Sriwijayanti | 教育文化省 | 平成２年Bコース |
| 18 | Mr. Viviarini | 商業省貿易研修センター | 平成４年Aコース |
| 19 | Ms. Cut Aisyah Ali | 工業省国際協力部 | 平成４年Bコース |
| 20 | Mr. Mochamad Abas Ridwan | 外務省海外経済総局 | 平成４年Bコース |

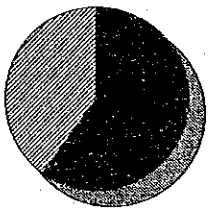
# Ⅱ. 帰国研修員の調査分析・集計及び結果

## II．研修員の調査分析・集計及び結果

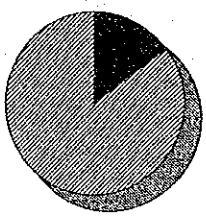
調査の対象となった研修員の総数はフィリピン５名、インドネシア２２名の計２７名である。フィリピンの面談者は５名、アンケートの回答者は４名、インドネシアの面談者は２０名、アンケートの回答者は２０名であるがアンケートのみが２名、面談者のみが２名である。以下の質問内容及び回答はアンケートか面談のいずれか、もしくは、その両方の回答である。

### ２．１　日本語研修と仕事

① 帰国後、担当する仕事の変更（インタビューより）



フィリピン



インドネシア

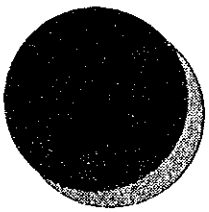
| | フィリピン | インドネシア |
|---|---|---|
| 変わった ■ | 3 | 3 |
| 変わらない ▨ | 2 | 17 |

- 日本人専門家とフィールドワークしている。（ｱﾆｰ[労働省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
- 文部省の奨学金のプログラムの担当になった。（ﾗﾓﾝ[國家經濟企劃庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
- （調査時は帰国後４カ月）３ヵ月後にタイか日本の大使館に移動の予定。（ｸﾞﾚﾝ[外務省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
- 来日前はカウンターパート，帰国後は bilateral division に移動。（ ﾀﾞﾃﾞﾝ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
- 課が移動。（ﾃﾞｨﾅ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
- 2 国間協力から海外技術援助へ移動。（ｱﾐ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

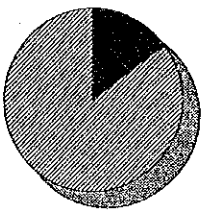
☆コメント

フィリピンでは研修の前後で仕事の内容が変わった研修員が多いが、インドネシアにおいてはあまり変化が無い。しかしながら、業務内容は同じでも、日本語ができるという理由で公式の訪問者の通訳を頼まれたり（ｱﾝﾃﾞｨ，ﾀﾞﾃﾞﾝ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）、初級クラスの授業を持ったりすることがあり（ｴﾃﾞｨ，ﾄｳｷｵﾉ[職業訓練ｾﾝﾀｰ]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）、それが仕事の一部にもなっている。

② 帰国後の昇進（インタビューより）



フィリピン



インドネシア

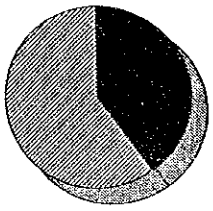
| | フィリピン | インドネシア |
|---|---|---|
| あった ■ | 5 | 3 |
| 無かった ▨ | 0 | 17 |

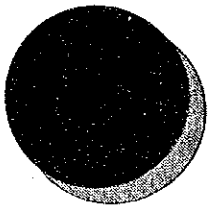
・帰国３年後に Man Power Development の Officer から Senior になった。
（ｱﾆｰ[労働省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・Human Resources Managementの Junior Officer から Officerになった。
（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・Senior special から Supervising Specialist になった。（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・１ランクあがる。（ｸﾞﾚﾝ[外務省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・外国での研修は１ヵ月が３単位として計算されるので１８単位となり昇進の対象になった。
（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・一つ上のランクに昇進。（ｱﾐ[労働省]，ｱﾘ[内閣大臣官房]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・あった。（ﾀﾃﾝ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ ）

☆コメント

ラモンさんのコメントにもあるように、フィリピンでは海外での研修は昇進に必要な点数に加えられるようで、全員が昇進している。また地位も上がった研修員が多い。それにくらべ、インドネシアでは殆どの研修員が昇進していなかった。必ずしも、海外研修が昇進の条件として考慮されていないようだ。

③ 研修の報告 （インタビューより）


フィリピン

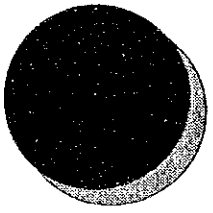

インドネシア

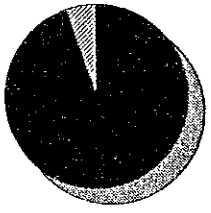
| | フィリピン | インドネシア |
|---|---|---|
| レポート ■ | 2 | 20 |
| 口頭 ▨ | 3 | 0 |

☆コメント

フィリピンでは口頭での発表が多いが、インドネシアでは全員文書での報告である。ラモン（国家経済企画庁；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）さんは英語のレポートを出しただけでなく日本語でも報告し、アミさん（労働省；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）はレポートに加え口頭での報告を行ったということである。

④ 研修員の派遣の必要性


フィリピン


インドネシア

| | フィリピン | インドネシア |
|---|---|---|
| 有る ■ | 5 | 18 |
| 無い ▨ | 0 | 1 |

・とても必要。もっと日本語を話せるひとがいたほうがいい。同じ課に専門家はいないが日本人家の学生と専は、1年に１００人ぐらい来る。インドネシアに来る人全てが対象。通訳を友人にお願いしている。(ﾗﾃｨ,[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・インドネシアと日本との協力のために必要。(ﾌｨﾌｨ[貿易ｾﾝﾀｰ];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・専門家が８人いる。(ﾑﾆｰﾙ[工業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・必要。専門家がたくさんいる。(ｱﾘ[内閣大臣官房];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・必要。日本との関係がある。(ﾀﾞﾃﾝ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・外交官として必要。(ﾘﾄﾞﾜﾝ[外務省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・必要である。割当が少ない。(ｸﾞﾚﾝ[外務省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・５年間はプロジェクトにとって必要。(ｱﾆｰ[労働省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・自分の課ではなくNEDA全体にとって必要。(ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・必要。今一人日本にいる。いろいろな国を扱う。日本の投資が一番多い。(ﾙﾙ[投資庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)

☆コメント

フィリピン、インドネシアともほぼ全員がこれからも研修員を派遣する必要があると答えている。必要が無いと答えた研修員（ｲｶ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）（理由はプロジェクトが終わったから）も再研修にはぜひ応募したいとの答えである。また、自分の課では必要無いが、省全体としては必要との回答の研修員もいた。（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

⑤ 職場における日本語に関する問題

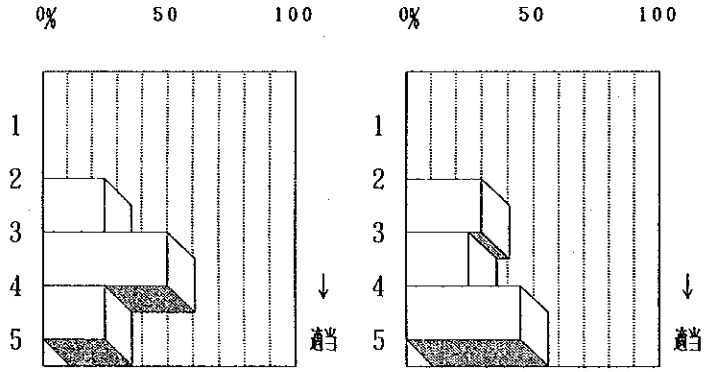
・相手が速く話すときが問題。（ｱﾆｰ[労働省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・話すとき日本語と英語が混ざる。（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・中小企業の人とのコミュニケーションに苦労する。日本とフィリピンではビジネス用語が異なる。（ﾙﾙ[投資庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・専門用語が分からない。（ﾔﾆ[農業省],ﾀﾞﾃﾝ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・漢字（ｱﾐ[労働省],ｴﾃﾞｨ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・実力がまだ不足。（ﾗﾃｨ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ]
・日本語を話したいが相手がインドネシア語で話す。（ﾘﾘｽ,ﾑﾆｰﾙ[工業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・日本語を使用する人が少ない。（ｱﾝﾃﾞｨ[農業省],ﾘﾄﾞｳﾜﾝ[外務省],ﾃﾞｨﾅ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・帰国したらプロジェクトが無かった。(ｲｶ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・日本人が年に１００人程くるが、通訳をする自信がない。(ﾗﾃｨ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

☆コメント

職場における日本語に関する問題は様々で日本語専修コースがこれから解決していかなければならない問題が示されているようだ。まず、レベルの問題である。日本語コース開設当初は初級から中級へかけてのコースのみだったことから当然、研修を修了しても仕事上の高度な話しをするには実力が不足である。（現在では中級コースも開設しているのでこのような問題は多少減少するのではないかと思われる）レベルだけではなく専門用語の特殊なことばの問題もある。日本語が話せる研修員でも、相手が現地のことばや英語を使うと日本語は必要ではなくなる場合もある。相手が現地のことばや英語がよく話せない人の場合は２か国語以上が混ざり合った言語でのコミュニーションになってしまう。また、仕事によっては日本人との接触の少ない場合もある。このような問題を解決するためにも日本語をより使用する機会のある職場へのＧＩ配布が必要だと思われる。

２．２　日本語研修に関して

①　応募条件（アンケートにより５段階評価）




フィリピン　　インドネシア

適当ではない ⇦　　適当 ⇨

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | 1 | 2 | 1 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | | 6 | 5 | 9 |

・コースは様々な工業・産業・技術部門へ応用が可能である。（ﾙﾙ[投資庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・ちょうど良い。（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

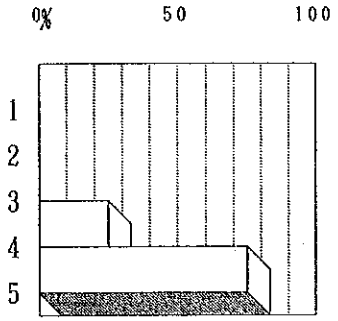
・前回の資格用件には修了時のレベルが明記されていなかった。（ｱﾝﾃﾞｨ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

・適当（ﾗﾃｨ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

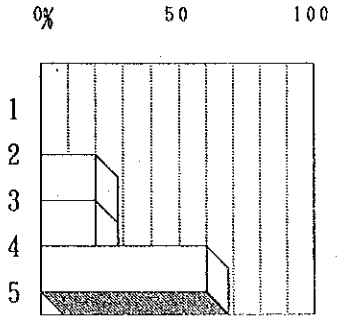
☆コメント

適当だと考えている人が殆どである。現在のところ応募資格は３０歳未満になっているが年度により多少の　変更はあり、来日した研修員から時々変更した方がいいとの要望もあるが、今回の調査では特に要望はなかった。

② コースの有益度（アンケートより，５段階評価）




フィリピン




インドネシア

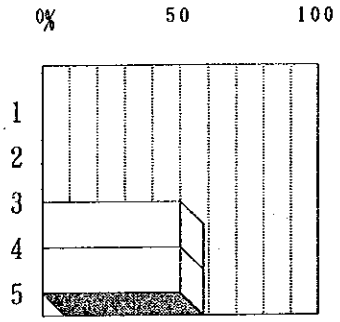
役に立たない　役に立った
⇦　　⇨

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | | 1 | 3 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | | 4 | 4 | 12 |

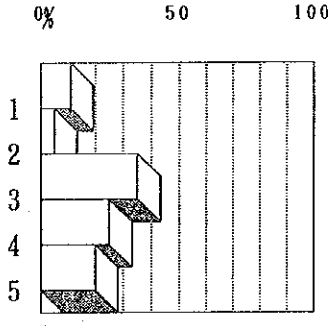
・JICA-TTCコーディネーターとしての現在の仕事に非常に役立っている。
（ﾌﾞﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・非常に役に立っている。投資推進協力の仕事に深く関係している。（ﾙﾙ，[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・個人的に役立っている。（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・他の言語を知るためにも有益だった。（ｼﾞｮｺ ﾌﾞﾘｵﾉ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・日本人とコミュニケーションができて、日本の生活について知ることができる。
（ｽﾌﾟﾘ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・日本語しか話せないJICAの専門家や日本人の訪問者とコミュニケーションができた。
（ｴﾃﾞｨ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・日本人とコミュニケーションができる。（ｲｶ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・役に立つ。特に仕事がアジア関係。（ﾗﾃｨ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・はい、特に日本を知る手段として。（ﾘﾘｽ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

☆コメント
全体として役に立ったとの解答である。仕事の上で直接役に立っている場合も(ﾌﾞﾘｼﾗ)間接的に役に立って　いる場合も(ｲｶ, ﾘﾘｽ, ｽﾌﾟﾘ) ある。その他個人的にも役に立っている。（ﾗﾓﾝ）

③ 仕事への影響　（アンケートより，５段階評価）




フィリピン




インドネシア

低い　　高い
⇦　　⇨

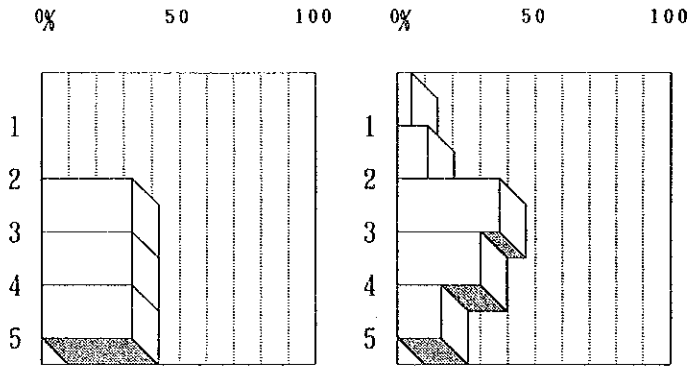
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | | 2 | 2 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | 2 | 1 | 7 | 5 | 4 |

・直接役に立った。（ｱﾆｰ(労働省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・とくに派遣されて来た日本人専門家と話すときに大きな影響力を持つ。（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・仕事を円滑にしている。（ﾙﾙ [投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・ある意味では。帰国してから現職で昇進したから。（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・私が現在働いている課は日本政府と何の関係も無い所。（ｱﾝﾃﾞｨ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・時々、日本人専門家との関係を円滑にしてくれる。（ｼｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・今は研修が終わったばかりなのでわからない、たぶんあとで。（ﾌｨﾌｨ[貿易ｾﾝﾀｰ]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・とても、日本人専門家（西野節雄）と直接一緒に仕事をしているから。
（ﾗﾃｨ[教育文化省高等教育課]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・日本人の訪問者があった時や日本に関するプログラムがあったら上司が私に参加を求める。
・はい、仕事が日本と関係がある。（ﾘﾘｽ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

☆コメント

フィリピンでは日本語が直接仕事へ影響しているようだが(ﾙﾙ, ﾌﾟﾘｼﾗ）、インドネシアでは必ずしもそうではないようだ。「2．2―②コースの有益度」のグラフと合わせて検討すると興味深い。研修員のコメントを見てもわかるが、フィリピンでは日本語が仕事の面だけではなく、他の面でも役立っているようだ。

④ 仕事との関連度（アンケートより，5段階評価）




フィリピン　　インドネシア

無い ⇦　　有る ⇨

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | 1 | 1 | 1 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | 1 | 2 | 7 | 6 | 3 |

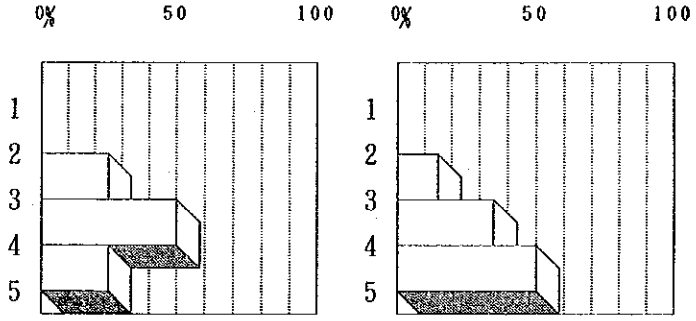
・日本及び日本語に関する知識や技術が得られた。職場で、日本人と一緒に仕事をする職員のための初級のコースを担当した。（ｱﾆｰ[労働省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・少なくとも、JICAの専門家や日本人の訪問者、あるいは日本から事務所に掛かってくる電話でコミュニケーションができる。（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・日本語や日本文化の知識が実際の仕事と関連がある。(ﾙﾙ, [投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・もう日本担当ではないが、局としては関連がある。（JICAの研修プログラムなどを扱う留学審議会で）（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・時々日本人専門家との関係を円滑にしてくれる。(ｼﾞｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・JICAの資料を読む( 時々書くこともあるので。わからないときは西野さんに説明してもらう。(ﾃﾞｨﾅ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・日本人とコミュニケーションができて、日本の生活について知ることができる。(ｽﾌﾟﾘ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・日本人とコミュニケーションができる。(ｲｶ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・殆ど日常の仕事には関係が無い。(ﾑﾆｰﾙ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・日本人専門家と学生を受け入れる仕事。(ﾗﾃｨ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

☆コメント

③の質問の回答と類似した結果である。インドネシアよりフィリピンの方が仕事で日本語を使用する機会があるようだ。

⑤ カリキュラムやシラバスの適切さ（アンケートより，５段階評価）




フィリピン　　インドネシア

適切ではない ⇦　　⇨ 適切だ

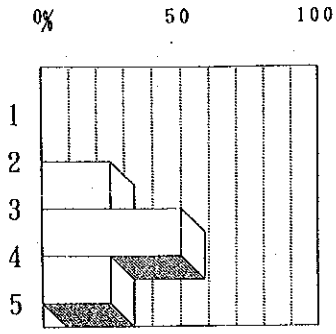
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | 1 | 2 | 1 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | | 3 | 7 | 10 |

・はい、でも少し改善点と修正点はあると思う。(ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・カリキュラムやシラバスは適当であったけれと、フィリピンか日本で再研修コースが企画されるべきである。(ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・研修員の仕事によっては非常に適当。(ｼﾞｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・初級は適切である。(ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ[労働省], ｱﾐ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・適切だった。(ﾕﾅﾆ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・話す勉強をもっとすべきであった。(ﾘﾘｽ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

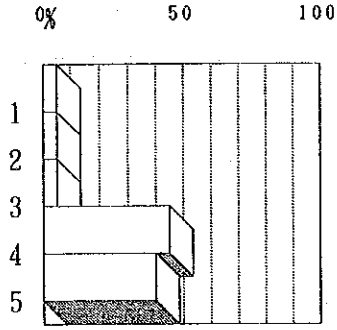
☆コメント

殆どの研修員が適当であるとの答えであるが、中級のカリキュラムや取り上げる専門分野の再検討が必要であろう。

⑥　コースのレベルの適切さ（アンケートより５段階評価）




フィリピン




インドネシア

適当ではない　適当
⇦　⇨

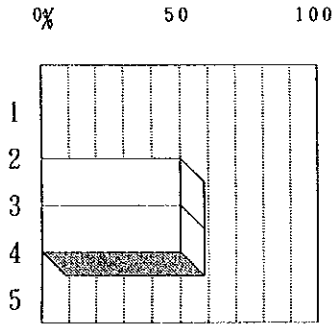
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | 1 | 2 | 1 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | 1 | 1 | 1 | 9 | 8 |

・研修時は適切でしたが、プログラムの望ましい効果を維持するためにもっと上級レベルのプログラムが企画されるべきである。（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・いいえ、それ以上に必要だから。初級レベルだったからというのはわかるけれど。レベルはもっと高い方がいい。（ﾘﾘｽ[工業省]，ﾃﾞｨﾅ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・はい、以前は全然できなかった。（ｱﾐ[農業省]，ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・いいえ、教えるのが速すぎて、期間が短すぎた。（ﾗﾃｨ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

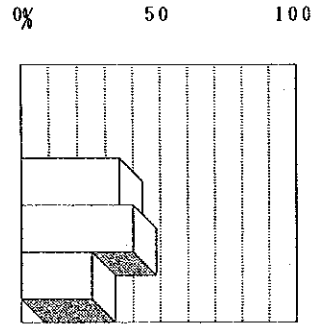
☆コメント

以前は初級から中級の初めまでのプログラムのみであったため、今回の調査ではもっと上級レベルのプログラムを望む声が高かった。レベルは高い方がいいが、教えるのはゆっくりの方がいい等、矛盾した面もある。（現在のプログラムでは、初級のみという制限を外し、既習者も受け入れている。従って、学習者は３クラスに分かれて学習しているため以前より高いレベルのコースが存在している。）

⑦　研修内容の難易度（アンケートより５段階評価）




フィリピン




インドネシア

わかり難い　わかり易い
⇦　⇨

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | 2 | 2 | |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | | 7 | 8 | 5 |

・初めは難しかったが、後で簡単になった。漢字の学習はもっと練習の時間が必要だった。（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・わかりやすかった。（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・漢字は難しい。（ｲｶ，[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ，ｱﾆｰ[労働省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・分かりにくいところもありましたが、宿題も沢山ありました。（ﾕﾅﾆ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

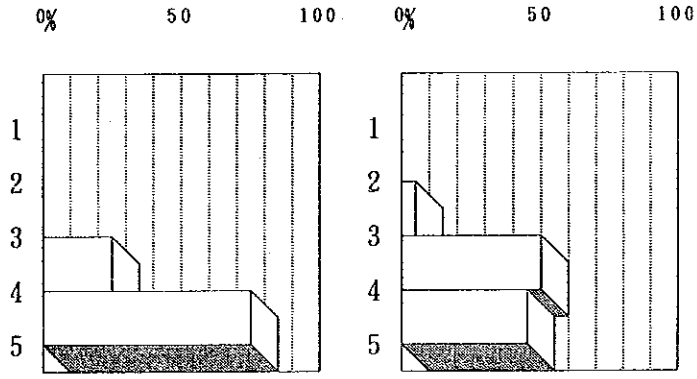
・よくわかった。（ﾗﾃｨ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

・はい、漢字以外。（ﾘﾘｽ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

☆コメント

全体として、わかりやすいという回答であるが、漢字にはやはり苦労していたようだ。

⑧ 指導の適切性（アンケートより５段階評価）




フィリピン　　インドネシア

適切ではない ⇦　　適切だ ⇨

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | | 1 | 3 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | | 1 | 10 | 9 |

・日本語の先生はよく働きたくさん教えてくれた。（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・研修員は職業人なので、時々指導方法は初歩的すぎるように感じた。（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・伊波、松岡、朋子先生のような先生がいるので教え方のシステムや方法に疑いの余地は無い。（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・宿題が多すぎて、復習の時間が無かった。（ﾑﾆｰﾙ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

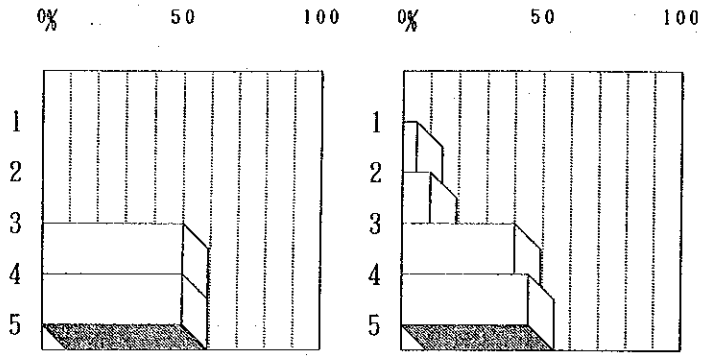
・適切であるが、授業は速すぎた。（ﾗﾃｨ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

・はい、でも日本の話題をもっと提供すべきだった。（ﾘﾘｽ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

☆コメント

指導にはほとんど高い評価が与えられているが、宿題や進度等に不満の声もある。

⑨　使用教材の適切性（アンケートより５段階評価）




フィリピン　　インドネシア

適切ではない ⇦　　適切だ ⇨

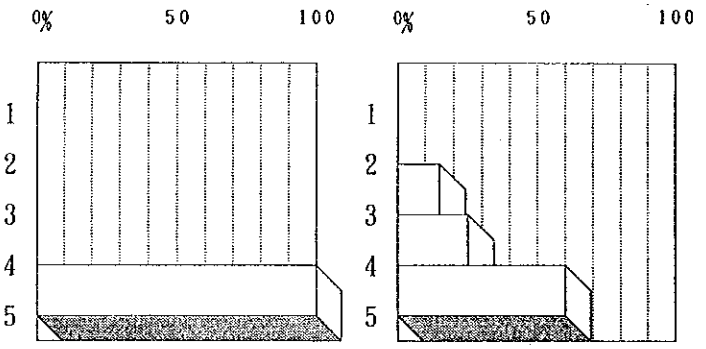
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | | 2 | 2 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | 1 | 2 | 8 | 9 |

・たくさんの視聴覚機器が役に立った。（ｱﾆｰ［労働省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・授業を興味深くするためにもっと高度な視聴覚教材が必要。（ﾙﾙ［投資庁］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・分冊５，６を終える時間がなかった。あと３ヵ月あればもっと深く学習ができたであろう。（ﾗﾓﾝ［国家経済企画庁］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・多くの教材をもらった。（ｱﾐ［労働省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・とても役に立った。（ｲｶ［労働省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・レポートを書きすぎました。（ﾕﾅﾆ［農業省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・宿題が多すぎて、前の課を復習の時間が無かった。（ﾘﾘｽ［工業省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

☆コメント

多くの人が適当だと答えているが、教材が多すぎるとの意見もある。宿題に関しては現在のプログラムでは殆ど出していないので今後、同様の調査が行われたら、回答は異なるものになるであろう。

⑩　日本事情等の特別講義の有用性（アンケートより５段階評価）




フィリピン　　インドネシア

役に立たない ⇦　　役に立った ⇨

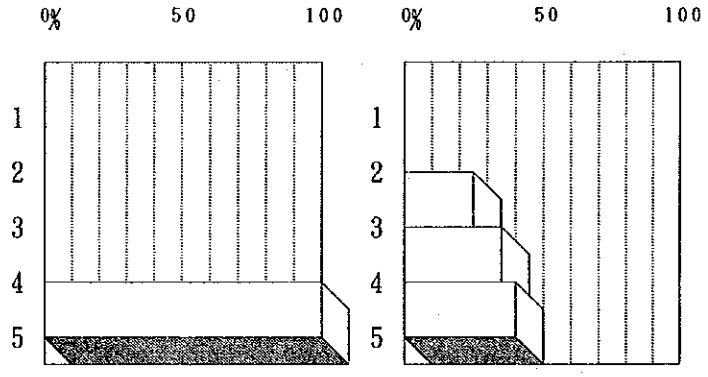
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | | | 4 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | | 3 | 5 | 12 |

・日本の歴史や文化や伝統について理解が深められた。（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・啓蒙的であった。日本や日本人に関する知識を広げた。（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・本土や沖縄の文化や宗教や生活についてもっと知るようになった。（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・日本について知りたい。（ﾌｨﾌｨ[観光ｾﾝﾀｰ]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・歴史や地理について話すのは練習になる。（ﾘﾘｽ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

☆コメント

全体として高く評価されている。日本事情の必要性は年々認められていて、現在のプログラムでは以前より充実した内容になっている。

⑪ プロジェクトワーク等の特別活動の有用性（アンケートより５段階評価）




フィリピン　　インドネシア

役に立たない ⇦　役に立った ⇨

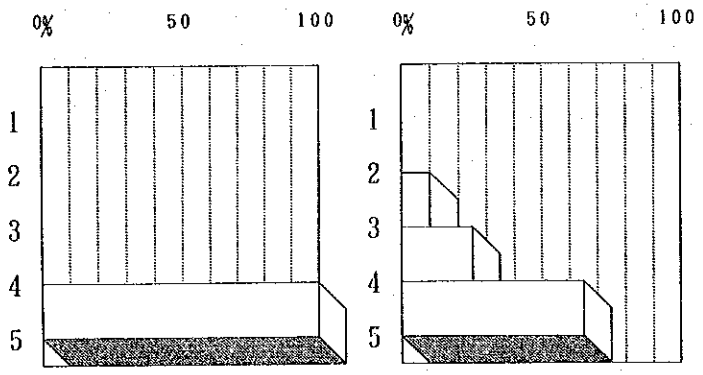
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | | | 3 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | | 5 | 7 | 8 |

・日本語での指示についていくことができた。（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・もっといろいろなプロジェクトワークを発展させ授業で活用させるべき。結果は明白で、非常にやり甲斐がある。（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・お国紹介でそれぞれの国の知識を持つことができた。（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・プロジェクトにかける時間をもっと長くして欲しい。（ﾘﾘｽ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

☆コメント

年度によりプロジェクトワーク（雑誌製作や劇等コースの全員が参加して何かを仕上げる作業のこと）の内容には変化があるが、高い評価が与えられている。日本語コース開設当初よりも現在では１コースで取り組むプロジェクトの数も多く時間も長くかけている。

⑫　研修旅行等の特別活動の有用性（アンケートより５段階評価）




フィリピン　　インドネシア

役に立たない ⇦　　役に立った ⇨

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | | | 4 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | | 2 | 5 | 13 |

・教室で学習したものをいろいろな場面で実際に応用練習することができた。
（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・教室学習の強化になった。（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・広島などへの研修旅行を企画してくれたことに特別に感謝の気持ちを持っている。
（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

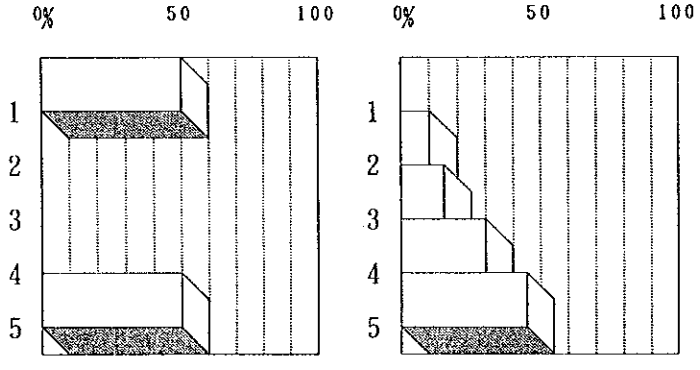
・日本のことがよくわかるようになった。（ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ[労働省]，ｱﾐ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

・とても良かった。（ｲｶ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

☆コメント

大変好評である。これからも、このプログラムを充実させていきたい。

⑬　スピーチコンテストの有用性（アンケートより５段階評価）




フィリピン　　インドネシア

役に立たない ⇦　　役に立った ⇨

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | 1 | | | | 2 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | 2 | 3 | 6 | 9 |

・スピーチは自分自身で書いた文の方がいい。(ｱﾆｰ[労働省], ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)

・とてもおもしろかった。全員にスーピーチをするチャンスが与えられるべきである。(ﾙﾙ[投資庁], ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)

・スピーチコンテストにかならずしも出なくてもよかった。(ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁], ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)

・自分の日本語の能力が分かった。(ｱﾐ[労働省], ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

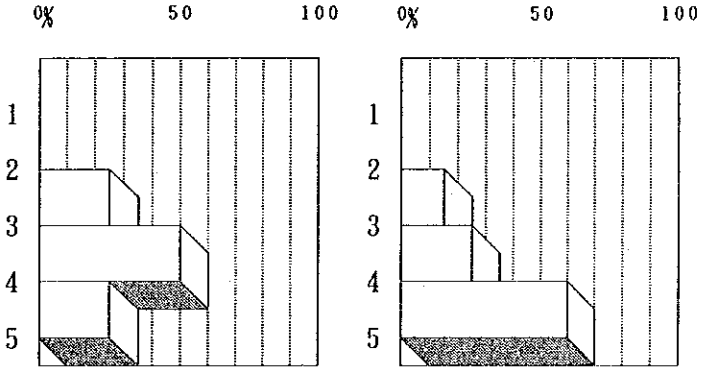
・急いで覚えた。(ｲｶ[労働省], ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

・練習をもっとゆっくりすべきだ。(ﾘﾘｽ[工業省], ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ]

☆コメント

スピーチコンテストは全体としては高く評価されているが、評価を低く出した研修員も３人程いる。能力を延ばすチャンスではあるが、練習の方法も含めて検討の余地がある。参考までに、昭和６０年度のスピーチコンテストは物語を読むコンテストであった。

⑭　日本語の設備の有用性（アンケートより５段階評価）




フィリピン　　インドネシア

役に立たない ⇦　役に立った ⇨

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | 1 | 2 | 1 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | | 3 | 5 | 17 |

・はい、特にＬＬ教室が役にたった。(ｱﾆｰ[労働省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)

・近代的ですばらしい設備で非常に役にたった。(ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)

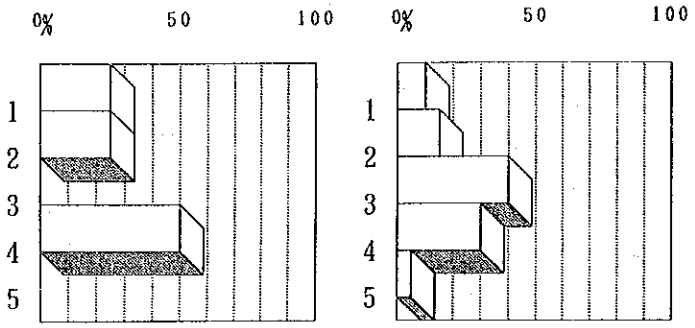
・非常に役にたった。(ﾙﾙ[投資庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)

・整っている。(ｲｶ[労働省], ﾗﾃｨ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

☆コメント

高い評価が与えられた。ほぼ満足しているようだ。

⑮　研修期間の妥当性（アンケートより５段階評価）




フィリピン　　インドネシア

妥当ではない ⇦　　⇨ 妥当だ

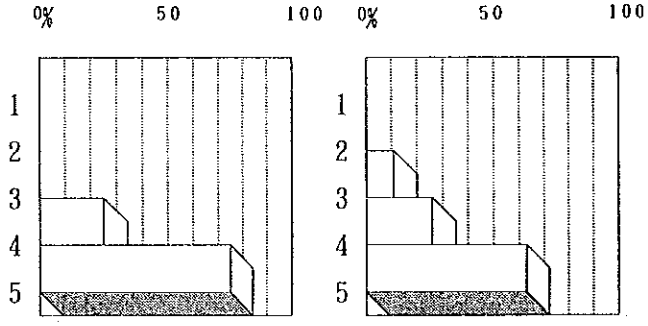
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | 1 | 1 | | 2 | |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | 2 | 3 | 8 | 6 | 1 |

- 極めて短かった。（ｱﾆｰ［労働省］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
- ６ヵ月が適当であった。（ﾙﾙ［投資庁］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
- ６ヵ月は充分ではない。（コース内容を全部消化するためには短すぎた。特に漢字の練習など。）（ﾗﾓﾝ［国家経済企画庁］，ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
- もっと長い方がいい。（ｼﾞｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ［農業省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
- 充分じゃない。１年以下だった。（ｱﾐ［労働省］，ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ［労働省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
- 充分じゃない。（ｲｶ［労働省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
- １０～１２ヵ月に伸ばすべきである。（ﾑﾆｰﾙ［工業省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
- 短かったですが、カリキュラムやシラバスはたくさんあった。（ﾕﾅﾆ［農業省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

☆コメント

研修期間に関しては、不満の声が多い。もっと長い研修を希望する意見が多く、希望期間の集計は以下の通りである。（日本語コース開設当初の頃の月数はＡ・Ｂ両コースとも６カ月であったが、６２年度からＢコースのみ８ヵ月、そして平成５年度からＡ・Ｂ両コースとも７ヵ月になった。）

⑯　沖縄の研修地としての適性（アンケートより５段階評価）




フィリピン　　インドネシア

適当ではない ⇦　　⇨ 適当だ

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | | | | 1 | 3 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | | | 2 | 5 | 12 |

・アセアンの研修員にとって沖縄の気候はとても良かった。(ﾌﾞﾘｼﾗ[運輸通信省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・沖縄は学習するのに適した場所であったが、実際に応用するには制限があった。
(ﾙﾙ[投資庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・とても良かった。(ｲｶ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・他の場所より沖縄は住みやすい。(ﾑﾆｰﾙ[工業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・静かなところだった。(ﾕﾅﾆ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・OIC は研修地として適当である。(ﾗﾃｨ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・人の心が暖かくて、学習の助けにもなる。(ﾘﾘｽ[工業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

☆コメント

大多数の研修員が満足したようだ。気候と人々の心が共に温かいと好評であるが、日本語を使用する機会　が豊富ではないのが残念である。

⑰　研修で、最も役に立ったこと（アンケートより）

・技術的なハンドアウトを少し翻訳することができた。JOCVとJICAの専門家とより円滑に仕事ができるようになった。(ｱﾆｰ[労働省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・「技術研修のための日本語」(ﾌﾞﾘｼﾗ[運輸通信省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・日本文化や伝統や日本人の生活の理解と基本的知識(ﾙﾙ[投資庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・日本語でコミュニケーションするのに役立った(ｼｮｺ ﾌﾞﾘｵﾉ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・会話，読み方，書き方(ﾌｨﾌｨ[貿易研修ｾﾝﾀｰ];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・技術用語，コミュニケーション　スキル(ﾃﾞｨﾅ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・日本語が話せるようになり、日本語を教えることができるようになった。
(ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ[労働省],ｱﾐ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・会話(ﾔﾆ,ｴﾚﾝ[農業省],ﾘﾘｽ[工業省],ﾘﾄﾞｳﾜﾝ[外務省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・本(ｲｶ[労働省],ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・日本への理解が深まった(ｼｽﾜﾝﾄ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・仕事に役立った。(ﾗﾃｨ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・文法，テープ，ビデオ，会話(ｱﾘ[内閣大臣官房];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

☆コメント

最も役に立ったこととして、日本語の能力を挙げた研修員、日本語の知識を挙げた研修員、物質的な面を挙げた研修がいる。能力としては、会話・コミュニーション能力・知識では文化・伝統等、物質面ではテープ・ビデオ等である。

⑱　もっと研修しておきたかったこと（アンケートより）

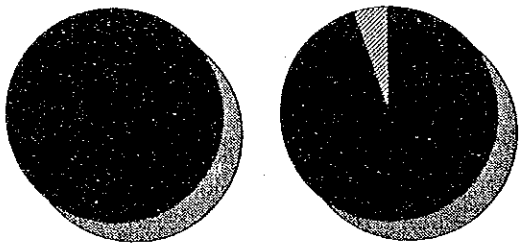
- 漢字、作文、翻訳、辞書を使用しての専門書の翻訳(ｱﾆｰ[労働省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
- ビジネス日本語とその実戦(ﾙﾙ[教育庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
- 日本本土と沖縄の生活には大きな違いがあるのでもっと勉強したかった。
  (ﾗﾓﾝ,[国家経済企画庁],ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
- 日本語のことをもっとしりたかった。(ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 文法，文化，漢字，技術用語(ﾔﾆ,[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 漢字が書けるようになりたかった。(ｱﾐ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 口頭練習(ﾑﾆｰﾙ[工業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 日本人との交流(ｼｽﾜﾝﾄ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 会話(ｱﾘ[内閣大臣官房];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 読みと書き(ﾘﾄﾞｩﾜﾝ[外務省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

☆コメント

内容は研修のすべてに及んでおり１つの領域に絞ることができないので、その希望を全部満たすのは困難であるが、「２．４―②再研修での希望学習内容」とも考え合わせ、今後の検討が必要であろう。

## ２．３　現在の日本語の使用状況

①　日本からの雑誌等を読む機会（インタビューより）



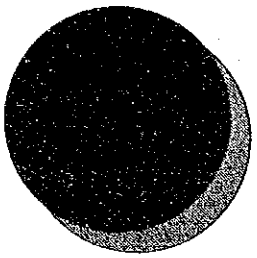
フィリピン　　インドネシア

| | フィリピン | インドネシア |
|---|---|---|
| 有る ■ | 5 | 19 |
| 無い ▨ | 0 | 1 |

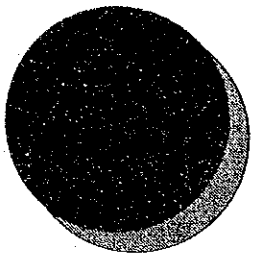
☆コメント

「kenshuin」というJICAの雑誌を殆どの研修員は挙げている。「Look Japan」を挙げた研修員もいる。(ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ,ﾑﾆｰﾙ[工業省],ｱﾘ[内閣大臣官房],ﾁｭｳ[工業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ) しかしながら、雑誌は何も届いていないという研修員もいる。(ｴﾃﾞｨ ﾄｩｷｵﾉ[職業訓練所];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

② 日本語の有用性（アンケートより）



フィリピン



インドネシア

| | フィリピン | インドネシア |
|---|---|---|
| 役に立つ ■ | 4 | 20 |
| 役に立たない ▨ | 0 | 0 |

・JICA-TTIコーディネーターとして非常に役にたっている。（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・コミュニーションは一方通行ではない。仕事で理解してもらえることは非常に重要である。（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・友人、知人とのコミュニーションに日本語を役立てている。（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・特に日本の労働組合「JIL(Japan Institute Labor)」との話し合いのとき役にたっている。（ｱﾆｰ[労働省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

・時々日本人とコミュニーションする。（ｽﾌﾟﾘﾔﾃﾞｨ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

・日本語の先生になった。（ｲﾝｸﾞﾙﾃﾞｨ，ｱﾐ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

・インドネシア人に日本語を、日本人にはインドネシア語を教えるチャンスがある。（ｱﾝﾃﾞｨ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

・時々役に立っている。日本人専門家とコミュニーションする時に（ｼﾞｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

・先生になりたい。（ﾌｨﾌｨ[貿易ｾﾝﾀｰ]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

・仕事に直接関係があるから。（ﾃﾞｨﾅ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

・日本語は役に立つ。（ｲｶ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

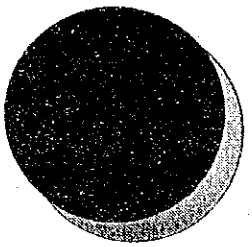
・仕事でJICAのフレンドシップのプログラムと政府の資金を扱っている。（ｱﾘ[内閣大臣官房]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

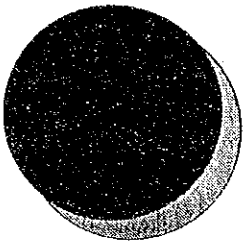
・役に立つ。日本人に説明をしたり世話をしたりしなければならないので。（ﾗﾃﾞｨ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

☆コメント

理由は異なるが一様に日本語は役に立っているとの回答である。仕事に役に立っている場合も、組合活動で役に立っている場合も、個人的に役に立っている場合もある。（2．2―②を参照）

③　日本語の必要性（アンケートより）


フィリピン


インドネシア

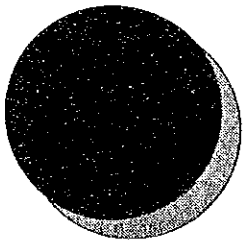
| | フィリピン | インドネシア |
|---|---|---|
| 必要 ■ | 5 | 20 |
| 必要ではない ▨ | 0 | 0 |

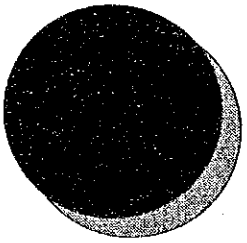
・日本語でのコミュニーションスキルを高める必要がある。（ﾌﾟﾘｼﾗ［運輸通信省］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・現在の自分の日本語のスキルは充分ではなく限られている。ビジネスミーティングや会議には適さない。（ﾙﾙ［投資庁］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・日本語の能力を英語で現在話しているレベルにまで高めたい。（ｱﾆｰ［労働省］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・もっと達したい。（ｽﾌﾟﾘﾔﾃﾞｨ［労働省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・読み・書きができるようになりたい。（ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ，ｱﾐ［労働省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・必要である。（ｼﾞｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ［農業省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・日本語で書かれた日本語の書類やレポートを理解するため。（ﾃﾞｨﾅ［教育文化省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・日本語からインドネシア語に、またその逆に翻訳する必要がある。日本人専門家への許可を出す手続きのときに必要である。（ﾗﾃﾞｨ［教育文化省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・日本人と会って話しをする機会が多い。（ﾘﾘｽ［工業省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）

☆コメント

全員が必要であると回答している。「２．２―②有益度」や「２．２―③仕事への影響」「２．２―④　仕事との関連」「２．３―②日本の機関との接触」等の項目の結果を見れば予想できる結果と言えよう。

④　日本語の継続学習（アンケートより）


フィリピン


インドネシア

| | フィリピン | インドネシア |
|---|---|---|
| している ■ | 4 | 14 |
| していない ▨ | 0 | 6 |

・時間があれば、時々自分で日本語を勉強している。(ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・フォーマルな方法で日本人の友人に英語を教え、彼らに日本語を習っている。
(ﾙﾙ[投資庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・時間が許せば、カタカナ、漢字など練習したり読んだりする。(ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・時間がないのでしていない。(ｱﾝﾃﾞｨ,ｼｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ,ｳﾀﾐ[農業省],ｲﾗ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・国際交流基金の試験に受かった。(ﾃﾞｨﾅ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・時間がないのでまだ。(ｼｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・国際交流基金の試験を受けたい。(ﾗﾃﾞｨ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・継続学習はしていないが日本人の友人や日本人のカウンターパートと努めて話をしている。
(ﾘﾄﾞｩﾜﾝ[外務省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・継続学習をしているがそんなに頻繁ではない。(ｽﾌﾟﾘﾔﾃﾞｨ,ｲｶ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

☆コメント

多くの人が継続して学習をしている。インドネシアでは公の機関で学習していなければ日本人との接触があっても「無し」の回答になっている。従って、実際は統計より日本語に触れる機会があるようだ。

⑤ 現在の日本語の使用状況

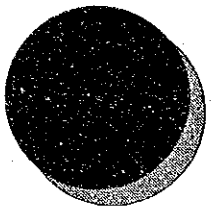
| 話す相手 | |
|---|---|
| | ・日本人のボランティアとJICAの専門家。時々使節団の人や訪問客。<br>(ｱﾆｰ[労働省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)<br>・私の事務所へ赴任してきたJICAの専門家（工藤さん，谷沢さん，橋本さん）や他の日本人の訪問者等と話す。また電話でも日本語で話す。(ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)<br>・日本人の投資家、ビジネスマン、移住者、日本人学生、日本人の婦人や子供と。<br>(ﾙﾙ[投資庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)<br>・日本へ行ってきた事務員と。スーパーなどで日本人の子供を見た時など日本語で話しかける。(ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)<br>・出会った日本人専門家やJICAの帰国研修員と。(ｱﾝﾃﾞｨ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)<br>・日本人専門家や他の日本人と。(ｼｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)<br>・西野節雄（JICAの専門家）やインドネシア大学の日本人の学生と。<br>(ﾃﾞｨﾅ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)<br>・出会った日本人や友人と。(ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ,ｱﾐ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)<br>・JICAのカウンターパートと。(ﾔﾆ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)<br>・日本人の専門家や友人と(ｴﾚﾝ,ﾕﾅﾆ[農業省]ｲｶ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)<br>・日本人の専門家や大使館の職員やJICAの職員。(ﾑﾆｰﾙ[工業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)<br>・日本から帰国した友人[ｼｽﾜﾝﾄ[農業省],ｱﾘ[内閣大臣官房];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)<br>・日本人の専門家や学生と。(ﾗﾃﾞｨ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)<br>・元日本語の研修員と。(ﾘﾘｽ[工業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)<br>・友人や日本人の外交官。(ﾘﾄﾞｩﾜﾝ[外務省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ) |

| | |
|---|---|
| 日本語使用の場面や状況 | ・英語での世間話し、会議、討論の時、時々日本語に変えて話しをする。<br>（ｱﾆｰ[労働省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>・仕事関係の場面で。（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ，ﾃﾞｨﾅ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・時々先生として、時々学生として、ビジネス会議、連絡会などで。<br>（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>・インフォーマルな場面<br>（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]，ﾌｨﾘﾋﾟﾝ，ｱﾝﾃﾞｨ，ｴﾚﾝ[農業省]，ﾘﾄﾞｩﾜﾝ[外務省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・時々、フォーマル・インフォーマルなディスカッション<br>（ｼﾞｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ[農業省]，ﾌｨﾌｨ[貿易ｾﾝﾀｰ]，ﾑﾆｰﾙ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・クラスで（ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ，ｱﾐ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・職場で。（ｲｶ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・電話や要人を接待するとき。（ﾕﾅﾆ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・公の場で。（ﾗﾃﾞｨ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・休み時間のような自由なとき。<br>・電話や会議。（ｱﾘ[内閣大臣官房]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ） |
| 会話の内容 | ・仕事、訓練、労働組合、婦人問題、労働問題など。（ｱﾆｰ[労働省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>・主に事務所の会話、質問やその答え。挨拶など。（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>・ビジネスのアドバイスや情報提供、フィリピンの投資政策、毎日の日程．フィリピンの文化や伝統等について。（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>・事務員とは日本での経験。（食べ物，買物、旅行等）などについて話す。<br>（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>・文化や興味のあることをいろいろ。（ｱﾝﾃﾞｨ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・仕事によって異なるが、一般的なことからある特定のディスカッションまで。<br>（ｼﾞｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・日常生活について。（ﾌｨﾌｨ[貿易ｾﾝﾀｰ]，ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ，ｱﾐ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・DGHDとJICAプロジェクト協力に関係のあることなら何でも。<br>（ﾃﾞｨﾅ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・仕事の内容、日常会話（ﾔﾆ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・あらゆること（ｴﾚﾝ，[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・仕事。（ｲｶ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・仕事、家族、その他。（ﾑﾆｰﾙ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・家族の事とか仕事の進みぐあい。（ｼｽﾜﾝﾄ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・プロトコール（要人を接待するときに使用する日本語）（ﾕﾅﾆ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・家族、日本人（日本語）、生活（ﾘﾘｽ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・日常会話と会議。（ｱﾘ[内閣大臣官房]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>・様々。（ﾘﾄﾞｩﾜﾝ[外務省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ） |

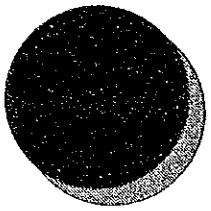
| | |
|---|---|
| 日本の文献や新聞等を読む機会 | • JICAからの文書のみ。新聞は知っている漢字が限られているから読めない。（ｱﾆｰ[労働省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>• 時々。（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ，ｼﾞｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ，ｴﾚﾝ，ｼｽﾜﾝﾄ[農業省]，ｲｶ[農業省]，ﾗﾃｨ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• 復習や記憶を新たにするために、機会があればいつでもやる。（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>• 時間がある時に。時々ノートを見たり初級のテキスト（分冊１～４）を見る。日本の番組をテレビで見ることもある。（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>• 全くない。（ｱﾝﾃﾞｨ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• 時々。でも新聞はまだ。（ﾌｨﾌｨ[貿易ｾﾝﾀｰ]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• 少し。（ﾃﾞｨﾅ[教育文化省]，ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• 日本語の本のみ。（ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ，ｱﾐ[労働省]，ﾘﾘｽ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ]<br>• 読まない。（ﾔﾆ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• 日本語の教科書。（ﾕﾅﾆ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• 日本の雑誌。「Look Japan」（ｱﾘ[内閣大臣官房]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• 殆ど読まない。（ﾘﾄﾞｩﾜﾝ[外務省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ） |
| 日本語を書く機会 | • 友人への簡単な手紙。（ｱﾆｰ[労働省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>• 一度沖縄の先生や友人に書いたことがある。（ﾌﾟﾘｼﾗ[運輸通信省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>• 沖縄の友人や研修で日本へ行く事務所の人達に手紙を書く。（ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>• 沖縄の友人やホームステイをした家族に手紙を書く。日本語と英語のミックスになる。（ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）<br>• 時々（ｱﾝﾃﾞｨ[農業省]，ﾃﾞｨﾅ[教育文化省]，ﾘﾄﾞｩﾜﾝ[外務省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• まだない。（ｼﾞｮｺ ﾌﾟﾘｵﾉ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• 時々。でも少し。（ﾌｨﾌｨ[貿易ｾﾝﾀｰ]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• もちろん、書く機会がある。（ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ，ｱﾐ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• 書かない。（ﾔﾆ，ｼｽﾜﾝﾄ，[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• 書く。（ﾑﾆｰﾙ，ﾘﾘｽ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• 先生や日本人の友人に手紙を出す時。（ﾕﾅﾆ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）<br>• ホームステイの家族や友人に出す時。（ﾗﾃｨ[教育文化省]，ｱﾘ[内閣大臣官房]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ） |

2．4再研修に関して

① 再研修の必要性（アンケートより）



フィリピン



インドネシア

| | フィリピン | インドネシア |
|---|---|---|
| 必要 ■ | 5 | 20 |
| 必要ではない ▨ | 0 | 0 |

・コミュニケーションスキルを高めるため、もっと聴解練習や会話練習が必要である。
（ﾌﾟﾘｼﾗ［運輸通信省］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・仕事を更に円滑にするため。（ﾙﾙ［投資庁］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）
・学習したレッスンの復習に。（ﾗﾓﾝ［国家経済企画庁］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

☆コメント
全員再研修が必要であるとの回答である。

② 再研修での希望学習内容（アンケートより）

| | ﾗｼﾞｵやﾃﾚﾋﾞのﾆｭｰｽ | 新聞 | 日本事情 | ｽﾋﾟｰﾁ | 会議 | 討論 | 講義の日本語 | 職場の日本語 | 翻訳 | 漢字 | 手紙やﾚﾎﾟｰﾄ | 中上級ﾚﾍﾞﾙの一般日本語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | 1 | 3 | 3 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | 3 | 3 | 2 | 2 |
| ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | 9 | 3 | 3 | 4 | 7 | 3 | 8 | 3 | 12 | 7 | 9 | 16 |

（一人で幾つでも希望の項目を選んでも良いとの指示を与えた。）

・「技術研修のための日本語」，文法やスピーチの練習などの再研修コースが必要。
（ﾌﾟﾘｼﾗ［運輸通信省］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

その他の希望学習内容（記述による方法での回答）

・日本の文化（ｱﾐ，［労働省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・通訳（ｱﾝﾃﾞｨ［農業省］；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）
・労働省のようなところで働きたい。（ｱﾆｰ［労働省］；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ）

☆コメント

学習の希望が高いのが「中級レベルの一般日本語」「翻訳」で、次に高いのが「手紙やレポート」「ニュース」「講義の日本語」「漢字」「会話」である。以外に低かったのが職場の日本語である。

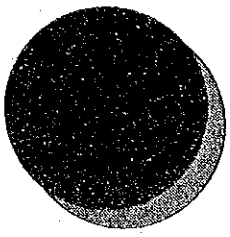
☆再研修での希望学習内容に関してインタビューでも意見を聞いた。その結果を以下に示す。

・実地訓練練がしたい。(ﾙﾙ[投資庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・職場の日本語を学習したい。(ﾌﾞﾘｼﾗ[運輸通信省],ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・外交官の日本語(ﾀﾞﾚﾝ[外務省];ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
・会話のみ。一般日本語がいい。(ﾗﾃｨ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・レポートの読み方、書き方、公式文書。(ﾃﾞｨﾅ[教育文化省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・中上級のコース(ｽﾌﾟﾘ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・観光、秘書関係の日本語。経営の日本語。(ｴﾃﾞｨ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・文法、翻訳、会話(ｲﾝﾀﾞﾙﾃﾞｨ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・技術の日本語(ｴﾃﾞｨ ﾄｩｷｵﾉ[職業訓練ｾﾝﾀｰ];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・全部(ｲｶ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・日本の文学、法律の日本語、一般日本語(ﾘｱ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・翻訳、作文(ｱﾐ[労働省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・会話、一般日本語、読み、書き、文法、聴解(ﾌｨﾌｨ[貿易ｾﾝﾀｰ;ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・書く、読む、文法、総合日本語（技術用語は少しでいい。）(ﾑﾆｰﾙ[工業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・職場の日本語。会議とか。(ﾘﾘｽ[工業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・文法、聴解、職場の日本語、会議等(ﾁｭｰ[工業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・実験のレポートを日本語で読みたい。(ﾔﾆ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・農業関係の日本語。農薬等。(ｴﾚﾝ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・通訳のコース（ｱﾝﾃﾞｨ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・教授法、通訳(ﾀﾞﾃﾝ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・農業の日本語、食料穀物(ﾕﾅﾆ[農業省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・会議の方法，スピーチ、敬語(ﾘﾄﾞｩﾜﾝ[外務省];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
・日常会話、一般日本語、事務所の日本語、電話の日本語(ｱﾘ[内閣大臣官房];ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

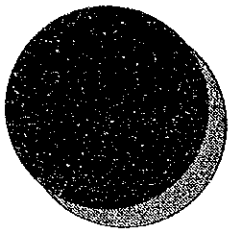
☆コメント

アンケートでは回答が得られなかった内容がインタビューで見られた。インタビューではより仕事に直結した専門性のある日本語の具体的な項目が上がった。

③　研修地の希望



フィリピン



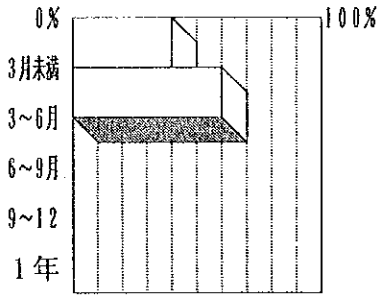
インドネシア

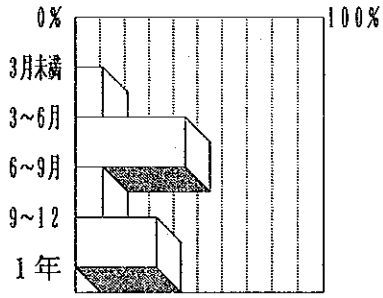
| | フィリピン | インドネシア |
|---|---|---|
| 日本での研修 | 5 | 20 |
| 自国での研修 | 0 | 0 |

☆コメント

全員日本での研修が良いと回答している。その理由として「自国にいるとどうしても仕事が入ってくるから。」や「家族が一緒だと集中できない。」「授業が終わると自国語を話す生活に戻る」等の意見が出た。日本の中では沖縄での研修がいいと言う研修員が７名、沖縄が半分で本土が半分の方がいいと言う研修員が１名、東京または本州の方がいいという研修員が２名である。

④　研修期間の希望




| | 3月未満 | 3~6月 | 6~9月 | 9~12月 | 1年 |
|---|---|---|---|---|---|
| フィリピン | 2 | 3 | | | |
| インドネシア | | 2 | 8 | 2 | 6 |

☆コメント

フィリピンとインドネシアでははっきりとした違いが見られる。フィリピンでは長期間職場を離れることが難しいのか、３～６ヵ月の希望が多い。インドネシアでは全く見られない３ヵ月未満の希望者も４０％いる。９～１２ヵ月と１年を合わせると44.4% で６～９ヵ月の希望者と同数になり、この両者で全体の88.9% を占める。６カ月以上の希望はフィリピンでは皆無である。この結果から、再研修の期間を設定する際には各国の事情も考慮に入れる必要があると思われる。

⑤　ＪＩＣＡへの希望

- 雑誌，ひらがな表が欲しい。(ｱﾆｰ[労働省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
- テープを送って欲しい。テストをもらって解答し、そのフィードバックが欲しい。日本語を教えたいので上級レベルの日本語を勉強したい。(ﾙﾙ[投資庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
- ＡＯＴＳの辞書，沖縄の写真(ﾗﾓﾝ[国家経済企画庁]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
- フィリピン以外で日本語を勉強したい。(ｸﾞﾚﾝ[外務省]；ﾌｨﾘﾋﾟﾝ)
- 沖縄のことがをもっと知りたい。(ｽﾌﾟﾘﾔﾃﾞｨ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 通信大学のようなシステムがあったほうがいい。ﾔﾆ，[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- もう一度日本語を勉強したい。日本語のテープを送って欲しい。(ｴﾃﾞｨ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- １年以上の研修(ｱﾐ[労働省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 日本語の教材（ｱﾝﾃﾞｨ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 再研修(ｴﾚﾝ，ﾀﾞﾃﾝ[農業省]，ﾘﾄﾞｳﾜﾝ[外務省]，ﾁｭｰ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 日本語を教えているので設備を充実して欲しい。(ｴﾃﾞｨ ﾄｳｷｵﾉ[農業調査所]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 宿題を送って欲しい。(ﾑﾆｰﾙ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 同窓会を援助して欲しい。(ﾕﾅﾆ[農業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 再研修でホームステイをしたい。(ﾗﾃﾞｨ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- ワープロが事務所にあったら、漢字の勉強にもなる。通信学習ができたらいい。(ﾘﾘｽ[工業省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 一か所だけでなくて、２ヵ月沖縄、２ヵ月大阪、２ヵ月東京で研修したい。(ｱﾘ[内閣大臣官房]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- 練習問題を課して欲しい。沖縄についての新しい情報や同じコースの研修員の動向が知りたい。(ﾃﾞｨﾅ[教育文化省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)
- OIC から雑誌が欲しい。(ﾘﾄﾞｳﾜﾝ[外務省]；ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ)

☆コメント

物質面での要望（教材等）、同窓会への援助、再研修への希望に交じって沖縄の情報や一緒に学習した同コースの研修員の動向が知りたいという要望もある。特記したいのは宿題や練習問題を送って欲しいという要望で、通信学習を提案した研修員が５人いたことである。

## ２．５まとめ

研修員の調査の結果を集計するにあたって、フィリピンとインドネシアを別々に処理し比較する方法を取った。項目によっては両国が類似している場合と異なる場合があった。以下、調査項目により結果を検討する。

①仕事と研修

国による相違がはっきり表れた。フィリピンでは海外での研修が直接昇進に結びついているようだが、インドネシアにおいてはそうではないという点、またフィリピンでは比較的、仕事上日本語を使用しているという回答が多かったのに比べて、インドネシアでは仕事の上で何らかの役には立っているが、担当業務とは直接関係がないという回答が多かった。

しかしながら、インタビューの反応ではフィリピンよりインドネシアの方が日本語の能力を維持していることから使用頻度は高いのであろう。また、両国のアンケートへの回答の仕方の違いとも考えられる。参考までにインドネシアでのインタビューはほとんど全て日本語で実施した。

職場においては両国とも、今後も研修員の派遣を必要としておりニーズがあることが認められた。また日本語に関する問題点も少なからずあるが、解決の方法を模索していきたい。

②日本語の研修に関して

全体としてほぼ高い評価が得られた。コースは有益であったとの回答がほとんどであり、上記にもあるが全員ではないにしろ仕事でも役に立っているとの回答である。カリキュラム、コースのレベル、指導性使用教材の適切性、特別授業、設備等にも高い評価が得られた。研修員のコメントを参考に今後もよりよい研修内容にしていきたい。

研修期間については不満の声も多く出た。短いとの意見が圧倒的に多かった。また、研修地として沖縄は適当であったとの意見がほとんどであった。満足していたようだ。研修で最も役に立ったこととして、コミュニーションスキルを挙げた研修員が多かった。もっと研修したかったことを一つに絞ることはできないが、今後再研修での希望学習項目とも関連させて検討していきたい。

③日本語の使用状況

使用状況をまとめてみると、かなりの研修員が「使用している」との結果が出た。これは仕事で活用しているだけでなく、公的・個人的なものも併せての結果である。しかしながら、継続学習に関してはやはり時間が無い等の理由で使用状況の結果より低い回答が出た。日本語の必要性は全員が感じており、継続学習の困難であることと相まって、再研修への期待が高かった。

④再研修に関して

再研修は研修員の全員が望んでいる。自国での研修でも良しとするが、日本での研修を強く望んでいるその希望学習内容に関しては多岐に渡っている。今後の検討事項である。研修期間の希望は国の事情が大きく反映しているようで、フィリピンとインドネシアでは全く異なる結果が出た。フィリピンでは6ヵ月以下の短期間の希望が多いのに比べ、インドネシアではほとんどが6ヵ月以上の研修を希望している。最後にJICAへの希望として、教材の供与への要望、再研修及び通信学習への要望が多かった。沖縄の最新情報に関する要望もあった。

以上の点を考慮に入れ、今後の研修をより充実したものにしていきたい。

# Ⅲ．訪問機関先での調査分析・集計及び結果

# Ⅲ．訪問機関先での調査分析・集計及び結果

## ３．１　フィリピン

帰国研修員の現状と動向

日本語専修コースにおけるフィリピンからの研修員は研修開始初年度（昭和６０年度Ａコース）に１名、その後昭和６２年度まで６名が続いたが、昭和６３年度Ａコース～平成４年度Ａコースまで受入れが途絶えた。平成４年度になってから、１名受け入れ、合計８名の研修実績がある。これら８名の帰国研修員の内、２名は米国へ移住し、１名は転職していたが、他の５名はそれぞれの分野で活躍している。今回のファローアップ調査においては５名の帰国研修員と面談することができた。

関連機関に対するフォローアップ

訪問機関先をフィリピンでは、１．帰国研修員の働く機関、２．外務省や貿易省などの日本語研修機関、３．大使館、の日本語教育機関にしぼった。1.で帰国研修員の日本語使用状況及び言語環境・今後の要望・再研修の必要性等、2.と３．で語学研修の状況及び今後の日本語教育のニーズ、日本語教育全般の現状等の調査を実施した。以下はその調査内容とその結果である。

## 1．帰国研修員の職場

①国家経済企画庁技術援助科上級奨学金支給科（National Economic and Development Authority:NEDA）

面接者：Ms.Aurora T. Collanties (Desk Officer)

帰国研修員：ラモン

面談の概要

ＧＩはＪＩＣＡから届いた時点で各関係省庁に配布していて、一人の募集に対して最終段階では５人くらいの候補者を絞り、コミィッティを開いて選考している。独自の選考基準を設定しており勤務年数、現職との関わりかた、コミュニケーション・スキル、態度、将来性等の項目において厳密に採点される。しかし、募集期間があまりにも短いので、充分な選考をする時間なく、出来ればＧＩを４～５ヵ月前には送って欲しいという要望があった。

割当人数に関しては、フィリピンは少ないという意見があり、出来ればＡＢ両コースに少

なくとも一人は受け入れ、それを今後も継続してほしいとのことであった。コースの期間はちょうどいいということであり、研修の昇進等への影響に関しては、他に重要な要因もあるので特に日本語研修とは直接の関係はないということであった。

再研修の必要性に関しては、今現在・同庁の帰国研修員は直接日本関係の仕事をしていないのでそれに関しては検討を要するという解答であった。

## 2. 外務省や貿易省などの日本語研修機関

①フィリピン貿易研修センター（Philippine Trade Training Center）

面接者：Ms. Angelina V. Angeles （Executive Director）

猪熊由里子（青年海外協力隊・日本語教師）

面談の概要

１９８９年に創設された。貿易実務に精通した人材の養成を目的としていて、商業日本語の研修を行なっている。学生数は４０人くらいで、そのうち学生１０％、公務員が２０％、あとの７０％が会社員及び経営者となっている。学習の動機としては(1)日本人経営の会社に勤めている、(2)生活レベルの日本語が必要、(3)日本人とビジネスを始めたいと思っている、(4)大学で学んだ日本語を更に伸ばしたい、(5)日本人の友達がいて、コミュニケーション能力をつけたいと思っている、などが主なところである。　青年海外協力隊の日本語教師が主に教えているが（現在フィリピンに、ＪＯＣＶは３人のみ）、その他にも大使館の講師が非常勤講師として教えている。

問題点としては、ＪＯＣＶが必ず来るものと思っているので、どこまでＪＯＣＶがやり、どこからフィリピン側にまかせればいいかという点と、ビジネス・コースを希望する人が多いので、そのニーズに応えるため夜間のクラスを開設したいというのが目下の懸案事項であった。

②外務省外務研修所（Foreign Service Institute ）

面接者：Ms. Mary Geraldine C. Naraja (Desk officer)

吉村　卓（青年海外協力隊・日本語教師）

帰国研修員：グレン

面談の概要

１９７９年に研修所を開設。アラビア語、インドネシア語、フランス語、日本語、スペイン語、中国日本語などの研修があるが、日本語が一番ポピュラーな言語で、その次がフラン

ス語となっている。学習者数はレベル１～レベル５までのクラスに１６８人いて、その内の３分の１強の約６０人がレベル１、５８人がレベル２で勉強している。レベル５になるとたった１２人しかいない。年齢は、２３歳～５７歳くらいまでで、女性の受講者が圧倒的に多い。テキストは「日本語初歩」（国際交流基金）をレベル１～レベル４のクラスで使用していて、上級クラスでは「日本語の基礎」（海外技術者研修協会）を使っている。

４４の事務所から研修に来ているが、優先順位としては外務省、貿易省、労働省の順となっている。動機は、(1)外務省の中で勉強したい人、(2)証書が欲しい人、(3)単なる知識として又教養として個人的に日本語を学習したい（日本語というより日本に関心があり、目的はあとからついてくるケース）等が主なものである。

ＪＯＣＶの日本語講師が１２年間続けて入っており、現在もＪＯＣＶの講師が一人とフィリピン人講師２人とが一緒に教えている。

問題点は、まだまだ日本語能力試験の受験者が少ないことである。英語でコミュニケーションができるので、日本語の必要性が希薄になってしまいがちで、もっと日本語能力試験の受験者を増やし、日本語学習の活性化を進めて行きたいとのことであった。

## 3. その他の日本語研修機関

在フィリピン日本国大使館広報文化センター　(Japan Information and Cultural Center)
面接者：　早坂　豊詮（一等書記官）

面談の概要

１９６８年に開始された。広報文化センターの中の日本語学校で、フィリピンで一番レベルが高い。他の機関でレベルに合ったコースがない場合に、このセンターへ来て学習する人が多い。学生数は３００人ぐらいで、レベルは８つに分かれる。初級３レベル、中級４レベル、上級１レベルで、全部終了するまでに３年かかる。上級クラスは１０人程度しかいないが、新聞の講読などかなり高度な学習をする。受講者は社会人が多いが、希望者は誰でも受け入れる。日本語が出来るといい仕事やいい給料がもらえるし、又翻訳の仕事も多いということが主な動機のようであった。問題は日本語教師が不足しているということであった。

早坂氏から、フィリピンの全体的な一般日本語教育事情についても伺うことができた。同氏によると、現在フィリピン大学、デ・ラサール大学、アテネ大学などの主要大学には日本語科はなく、トリニティ・カレッジで初めて日本研究科が設置される予定であるとのことであった。高等教育機関での日本語学習者は極めて限られているが、中等教育で日本語を第２外国語にしようという動きもあるようである。民間の日本語学校はフィリピン全島に約４０校あり、その学生数は約６、５００人くらいである。カビテ、バギオ、バターン、セブ、な

どには日本の企業団地や輸出促進区域があるため日本語を学習する人も多く、又ダバオには日系社会があるのでその子弟が日本語を勉強したがっているということであった。インフラストラクチャーと治安（政情安定）が整えば、もっと日本人が増え、日本語の需要が増えるであろうという早坂氏の見解であった。テレビの日本語ビデオ教材「ヤンさん」（国際交流基金）の放映が日本語学習に一役かっていて、日本語への一般的な関心の芽生えを象徴しているようであった。

## ３．２　インドネシア

帰国研修員の現状と動向

日本語専修コースにおけるインドネシアからの研修員は研修開始初年度（昭和６０年度Ａコース）に２名、その後平成４年度までに２８名の研修実績があり、日本語専修コースへの受入れ人数は一番多い。年間３～５人の研修員を平均的に受け入れていることになる。これら２８名の帰国研修員の内、今回のファローアップ調査においては、ジャカルタ市内に住む２０名の帰国研修員が調査に協力してくれた。

関連機関に対するフォローアップ（訪問機関先でのニーズ調査の内容と結果）

訪問機関を、１．帰国研修員の働く機関　２．日本人専門家へのインタビュー　３．国際交流基金や大学等の日本語教育機関にしぼり、1.で帰国研修員の日本語使用状況及・言語環境・今後の要望・再研修の必要性等、2.で日本人専門家から見た帰国研修員の日本語の活用状況及び今後のニーズ、3.で日本語教育全般の現状等の調査を実施した。以下はその調査内容とその結果である。

### 1. 帰国研修員の職場

①工業省国際協力局（ Bureau of International Relations, Ministry of Industry)

面接者：Ms.Ainsjah Taufik(Head of Bureau for International relations)

帰国研修員：ムニール、チュ、リリス

面談の概要

工業省での選考方法は５年以上の勤務者で仕事の上で将来性のある人、という非常に明快な基準で選考している。又日本語研修が昇進等へ及ぼす影響は、能力差などもあり、他の要因も関係して来るので、日本語研修が昇進の一要因とはなっていないという回答であった。今現在、帰国研修員に他の職員のための日本語教師になってもらいたいが、今の帰国研修員

のレベルだと教えるまではいかないというのが現状のようであった。

今後の工業省における日本語の必要性に関しては、公共団体や県の団体などが日本からよく来るし、又かなり多くのプロジェクト（例えば造船など）があるので必要性が高く、専門家も１２人いて英語を話せない人も多いので、日本語は必要であるということであった。

再研修に関しては、この省を優先的にさせてほしいという強力な要望があった。日本語の先生にインドネシアに来てもらい、現地でも日本語の研修を行う他に、日本でも再研修を行ってほしいということであった。再研修の内容への要望としては、専門家とのコミュニケーションのために専門用語を教えてほしいが、読み書きに関しては、ほとんど要らず、期間は六ヵ月以上だとポジションがなくなるので（給料はある）六ヵ月以内の方が望ましいということであった。

全体的な要望としては、(1)割当数が非常に少ないので、もっと増やして欲しい、(2)１コースに一人だけじゃなくてＩ省から２人か３人受け入れて欲しい、(3)選考期間も現在２ヵ月程度しかないのでもっと時間が欲しい、(4)５５歳で定年なので３０才以上４０才以下の人に年齢制限を広げて欲しい、そして(5)カセット、ビデオ・テープ、辞書類などの教材の支援、通信教育などを通して継続して日本語を教えてほしい、等であった。

②農業省作物保護局（Directorate of Food Crop Protection, Ministry of Agriculture）

面接者：Mr.Muhamad Satta Wigenasantana（Director of Food Crop Protection）

帰国研修員：ヤニ、エレン、シスワント、ジョコプリオノ、ウゲルタ、ウタミ、イラ

面談の概要

農業省作物保護局では、プロジェクトとの関係の深い部署から推薦制度で選んでいた。昇進等は日本での研修とは直接関係がない。現在の仕事上での日本語の利用度は、インドネシア語（少なくとも初めのうちは）も英語も出来ない専門家がいるので、日本語が役にたっている。以前は会議などでも使ったが、今は余りそのチャンスはない。しかし、もっと中、上級レベルの日本語の技術を身につけた人材が必要であった。スタッフとしては８カ月間席をあけるのはぎりぎりの所だが語学学習には短いというMuhamad 氏の意見であった。

今後の必要性としては、プロジェクト協力は２年前に終わったので、今新しいプロジェクトを期待しているところで、今後の必要性はそれ如何であるとのことであった。（ハードとソフト両方を含むと、１２年間で５５１のプロジェクトがあった。）

再研修に関しては、再研修があればサポートするが、２～３カ月くらいが良く、再度研修をするのなら、今度は技術専門用語などをもっと勉強してきてほしいということであった。

全体的な要望としては、もっと日本との協力や援助の可能性を求めているということであった。プロジェクトが設置されれば、その１年前から準備期間に入るので、本当に必要な人を研修に出せるということであった。

③農業省作物総局（Food Crop Protection,  Ministry of Agriculture）

面接者：Mr.Muhamad Satta Wigenasantana (Director)

Mr.Hidayat Gandaatmadija (Bureau of Foreign Cooperation)

大澤　慶幸（農業省官房計画局アドバイザー）

帰国研修員：アンディ、ユナニ、ダデン

面談の概要

日本語は、教師として短期間日本へ行く職員など（8日間の集中講習）を教えたり、専門家といっしょにフィールドワークに出かける時に使われている。

問題点としては、募集期間が非常に短いので締切までに時間がないことである。セカブから農業省作物総局に来るまでに一ヵ月かかり、充分な選考が出来ないということであった。

言語学習の適性があると思われる人材及び日本との関係の深いセクションで働くスタッフを対象にしているが、応募者が多いにもかかわらず、割当数が少なく、もっとチャンスを与えて欲しいという要望が出た。研修後の昇進等への影響は、言語能力も一つの考慮点になっている。

コースの期間に関しては、研修は仕事の一貫であるので8カ月の長期であっても職場の方は何とかなる。語学学習の期間としては、むしろ8カ月は短いという意見であった。

今後の必要性としては、益々日本との技術協力が増える一方で重要となるので、再研修には非常に賛成であり、是非、実施してほしいということであった。インドネシアでは教室を出るとインドネシア語なので、研修は日本での研修がいいということである。

再研修の内容への要望としては、基本的知識から農業専門用語、総合日本語，通訳養成もしてほしいし、読み書きも必要であり研修内容に入れてほしいということであった。

全体的な要望に関しては、農業省から年間３０人くらいの人が日本へ行くので（福井県のJapanese Agricultural Exchange Program―国際農業者交流協会―との交流が１０年も続いていて、２０才前後の農民が八ヵ月間日本でホーム・ステイし農業技術を勉強する。又日本からも一週間インドネシアでホームスティをするプログラムである）、研修前トレ―ニングをして本当に能力のある人を日本へ送りたい。そのために帰国研修員に日本語教師になってほしい、ＪＩＣＡには日本語教授法のファローアップ（たとえば教材など、特にインドネシア人向けの日本語教科書の支援など）をしてほしいということであった。

④外務省（Directorate General of Foreign Economic Relation, Department of Foreign Affaires）

面接者：Mr.Herry Harjono (Director of Technical Cooperation & Economic Services)

帰国研修員：リドゥワン

面談の概要

日本語の活用場面は、平常は日本からの要人が来た時に使うくらいであるが、実際に日本大使館への赴任等の仕事になれば、フルに使うことになる。

割当数に関しては、一省から一人の割当の継続を希望している。選考は、外務省の中の教育研修センターの基準で選考している。研修後の昇進等への影響に、日本語研修は直接の関係はない。

コースの期間は八ヵ月は長すぎるので、三ヶ月くらいがいいという意見である。一般的ににも日本語は重要な言語だと考えられていて、教育研修センターでも日本語は重要な言語となっている。

再研修に関しては、特に日本語だけがこの課で必要ということではないが、重要であると考えている。

⑤内閣大臣官房（Bureau for Technical Cooperation, Cabinet Secretariat of the Republic of Indonesia）

面接者：Mr.Husen Adiwisastra (Head of Bilateral Cooperation Division)

帰国研修員：アリ

面談の概要

日本語の活用状況は、日本語を使うチャンスはたくさんあるが（日本の政府関係の人が、年間約100 人くらい来るので）、英語でコミュニケーションするし、書類も全部英語なので日本語が余り生かされていない。フレンドシップ　プログラムで日本へ行く人と練習する程度である。選考に関しては既に各省庁で選ばれてくるので、余り問題がない。ただ他の国での研修との選択がある場合に問題が生じて来る程度である（毎年ヨーロッパ・北欧・他発展途上国へ５０人～６０人が派遣されている）。

今後の必要性としては、約１００人程度の日本人（専門家など）が年間こちらに来るし、２５０人のインドネシア公務員が内閣大臣官房を通して日本に行くので今後も日本語はたいへんに重要だと考えている。

研修の期間は仕事としては長いが言語を実際に使えるようになるには短すぎる、再研修の期間としては六ヵ月くらいが一番適当だと考えている。再研修の内容としては、内閣大臣官房からの研修員に関して言えば、コンピューター管理分野の日本語（ＪＳＰ）を勉強してきてほしいということであった。

全体的な要望は、内閣大臣官房が外国からの援助関係の研修を担当・管理しているが、内閣大臣官房内部だけでもたくさんの研修希望者がいるので、もっと割当数を増やしてほしいことである（年間６～７人が現実的要望である）。観光郵電省やインドネシア大学文学部日本語科の教職員も日本での研修を希望しているということであった。

⑥教育文化省（Bureau for International Cooperation, Department of Education and Culture）

面接者：Mr.Mohamad Afieq (Head, Bureau for International cooperation)

Mr.Mohamad Kodrat(Head, Division of America and Asia)

帰国研修員：ラティ

面談の概要

一人の公募に３０人以上が申し込むので、募集期間はもっと長いほうが良く、そうすればその仕事ぶり、技術、年齢、等を充分に検討して選考決定が可能となる。又研修後には、日本語能力も昇進の考慮点の一つとなっている。

今後の必要性としては、年間１００人程度の日本からの留学生の受け入れ、及び就学許可やビザの世話等を行うので日本語は重要であると考えている。

再研修に関しては非常にいいと思っているが、課はこの課だけではないので一人だけではなく、もっと増やしてほしいと要望している。

コースの期間としては、８ヵ月は少し問題があり、再研修の期間としては六ヵ月から７ヵ月くらいが適当だと考えている。

全体的な要望としては、毎年日本人学生が増える一方で、日本語ができる人材が切実に必要なので、毎年１人か２人は研修させてほしい。問題点としては、必要な所にアプリケーションが回って来ないということと、毎年アプリケーションを出しても割当がないということで受け入れられないことであるということであった。

## 2. 日本人専門家へのインタビュー

職業訓練向上計画(Center for Vocational and Extention Service Training)

面接者：　内海　幸雄(Project Team leader)

帰国研修員：エディ

面談の概要

日本語の活用状況としては、初めてきた専門家の世話をする時に日本語を生かしている。又民間の技能実習制度で日本に行く人たちのために教えることもある。（時々、国際交流基金・ジャカルタ日本語センターや大学の日本語の先生が教えるが、文法中心になるので標準カリキュラムを作ってもらってダルマ・プルサダ大学などの先生、インドネシア人大学生が先生になることもある。）本多先生（現ＴＩＣ講師）在任時には帰国研修員がカリキュラム作成などを手伝ったこともあった。

今後、セベストに情報処理科ディプロマ・コースを設置する予定なので、個別研修に出したいと考えている。今後は中級レベル～上級レベルの人材が必要となるので、沖縄でも今後個別研修を受け入れてほしい。個別研修は行く前に日本語を勉強する必要はなかったが、最近は研修してから行くようになったので、帰国研修員が事務職員でありながら日本語の先生もしている。非常に仕事量が多いので、専任の講師を必要としている。

問題は、研修員が帰国した後、インドネシア政府が彼らをどう生かしていくかである。今現在日本語研修は昇進等に影響は全くないが、彼らの中から将来本部で働けるような人材が出てほしいと考えている。要望としては、内閣大臣官房の調整で募集がここにはもう来なくなったが、研修に出したいのが実情である。だから、再研修に関しては、問題がなく、コースの期間（6～8ヶ月）も問題がない。

## 3. 他の日本語教育機関

①国際交流基金・ジャカルタ日本語センター

面接者：清水　基久　所長

面談の概要

1．事業内容

(1)　情報提供・情報交流

日本語や日本語教育についての情報を国内外から収集しセンター利用者に提供している。ニューズレターの発行等を通じて日本語教育関係者のネットワークづくりに協力している。

(2)　教師研修会・セミナーの実施

教育文化省や大学等の日本語教育機関と協力して、主に中等教育の日本語教師を対象とした研修会や巡回セミナー、日本語のシンポジウム等を実施している。現在教師研修会を一ヵ月おきに、2週間の研修を全国でやっている。対象は高等学校の中高等学校日本語教師研修会。（少なくともイロハが書け、正しい会話がきるというのが目標でそれに基本的な教授法や新しい教科書の使い方を研修する）

(3)　コンサルティングの実施

日本人とインドネシア人の専任の日本語教育専門家が、教授法、カリキュラム、教材等に関する助言、相談等のコンサルティングを週2回行っている。以前は教師のみが対象であったが、最近は留学相談などに学生が来るようになった。5人の専任講師のうち1人が担当。

(4)　日本語講座の運営

１９８０年よりジャカルタ日本文化センターによって運営されていた日本の講座を１９９

1年度　からジャカルタ日本語センターが運営している。開講中のコースには中級Ⅰ、Ⅱ、上級Ⅰ、Ⅱ、研　究科、留学準備講座等がある。民間の日本語学校の足をひっぱらないように中級以上のクラスのみ運営している。日本語能力試験3級以上の人を対象とする。対象は社会人が半分くらい（日系企業　勤務）で日本語学科の学生講師は日本からの日本語教育の専門家である。

(5)図書・教材ライブラリー

図書、視聴覚教材、雑誌等を日本語教師や日本語学習者のために提供している。教材用のコンピューター、視聴覚教材を設置して、研究、教材準備や学習ができるスペースを提供している。又専門図書は3万冊をめざしている。

(6)日本語教育機関への援助・協力

日本語教材制作、日本語についての各種プロジェクトやセミナー開催、国内外で行われる日本語についての会議出席等に必要な経費の援助を行う。又必要に応じて日本語教育教材や教室用教具、器具の提供をする。外務省日本語講座、ジャカルタ市役所の姉妹都市交流などへの資金、及び教材援助などをしている。

2．インドネシア日本語教育の現状について

学習者は6万人近くの人が今年日本語を勉強していて、韓国、中国、オーストラリア、インドネシアに次いで世界第4位である。６００人の日本語教師（１９９３年8月教育文化省推計）がいる。

| | 機関数 | 教師数 | 学習者数 | |
|---|---|---|---|---|
| 高等教育機関 | ３２ | １００ | ３，０００ | （大学、短大、専門学校） |
| 中等教育機関 | ４２３ | ３５５ | ４２，０００ | （中学／高校） |
| 一般日本語教育機関 | ９４ | ９０ | ５，０００ | （観光学校など） |

（教育文化省／インドネシア大・チャンドラ講師推定）

全国高等学校7千のうち、４００校が第2外国語の選択外国語の一つに位置付けられている。第1は英語、第2はフランス語、ドイツ語、アラビア語、日本語となっている。日本人と日本語で話すことを目指しているが読み書きの技能も目標としている。漢字は１００くらい学習する。中等教育機関での日本語教育に関しては政府が非常に熱心である。

一般日本語教育機関に関しては、観光立国を目指しているので今後急激に増える予想である。日本に対する関心は、経済先進国に対する関心が主で、それで日本語学習を始めたりしている。又観光業分野における会話中心の日本を習得したいという実務的な動機もある。

バリは爆発的に日本語学習者が増えている。日本語コースがあり（インドネシア人の教師4人で読み書きは教えない）、学生が時には８０人程度も一クラスにいることもある。

ここ１０年間に対日関心がとみに高まり、１９８６年に第2外国語として取り入れた。今

後それを国家レベルで広げる予定でいる。教育文化省、科学技術応用庁が日本語教育の推進に取り組む予定である。特に、青年層や科学技術分野で最も高く、これが、中等教育における日本語教育を盛んにしている理由の一つである。今後、若年層を中心に学習者増大の傾向は続くと思われる。

問題としては、良質の教師の確保がむつかしく、今後の対応が必要であるということと、インドネシア人向けのテキストがないことである。又、学習者のニーズに合っていない教え方の問題もある。もう一つは、日本語のテキストが図書館に送られて来ても、字がよめないので図書館司書が書棚にのせるまでに時間がかかっていたことである。しかし最近は、司書も浦和の養成コースで分類の方法などを研修するので良くなっている（海外秘書研修）。もう一つの問題は、ＬＬなどの機材が故障した場合、修理の方法がないことである。それらのフォローアップを要望しているのが現状である。又、浦和の外国人日本語教師養成コースに（短期・長期両方に）研修生を送っているが、帰国後５年半公務員として勤務する義務があるにもかかわらず民間の日本語教師に職を変える人がいる（公務員の４倍から５倍の給料があったり、又バリなどで観光案内や通訳をすると一日１００ドルもの高賃金の収入の得られるなどの理由で）ことも大きな問題である。

②国立ガジャマダ大学文学部日本語日本文学プログラム

面接者：Mr. Djoko Surjo ・・・ Dean
Mr. E. Suherman ・・・ Lecturer
百瀬　侑子・桑原　かなえ ・・・ 日本語講師

面談の概要

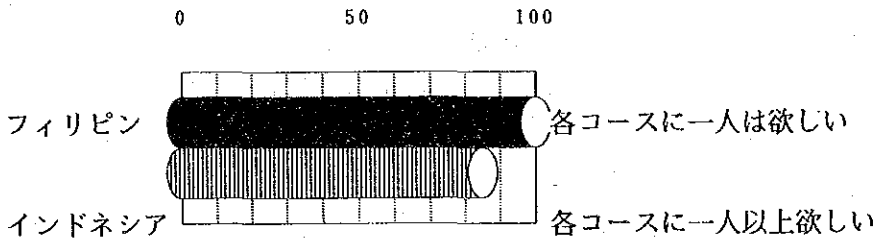
学生数は毎年３０人くらいである。学生数は毎年確実に増えているが、キャパシティーが今のところない状態である。今現在、全部で１２５人ぐらい（休学している人も含むと）いる。男女比を見ると、女性の方が圧倒的に多い（ちょうど日本の英文学科のようである。）日本語日本文学プログラムができてからまだ５年なので、来年初めての卒業生がでる。テキストとしては、「日本語初歩」（国際交流基金）のテキストから入る。４年次に、日本語の言語か文学を選択し、卒論をインドネシア語と日本語の両方で書く。卒業後は、日系企業就職希望か日本語の先生になるのが希望である。

現在までに３０年間日本語の教師が派遣されて来ていて、現在インドネシア人教師が５人と日本人教師が３人（一人はボランティア）がいるが、教員不足（質と量の問題）である。

## ３．３　フィリピンとインドネシアの調査結果概要の比較

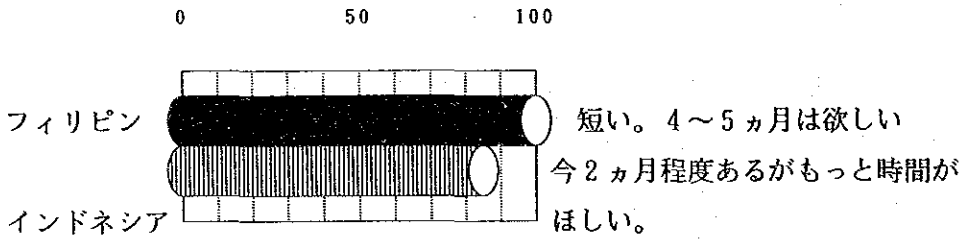
訪問機関先での調査の主な結果を表にまとめて見ると、以下のようになる。ただし、フィリピンの直接の関係訪問機関は一か所、インドネシアが７か所と、数字の上で大きなばらつきがあるが、実際の調査結果の概要を知る意味で、あえてここに比較することにする。

１．割当数に関して




農業作物保護局はプロジェクトがないということで返答がなかったので、インドネシアは割当数に関して１００％の答えではないが、フィリピンは一か所だけの調査なので、インドネシアの数値はむしろフィリピンよりはるかに高いものであると見ることができる。つまりインドネシア関係各省は割当数に関して少ないと考えており、今後増やしてほしいと考えているということが言えよう。

２．募集期間



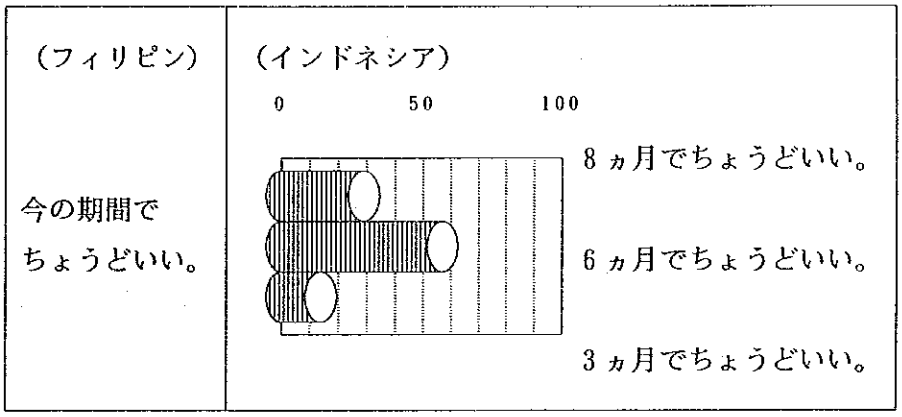

（農業作物保護局はプロジェクトがないということ返答なし）

３．選考の方法

| （フィリピン） | （インドネシア） |
|---|---|
| 独自の選考基準を設定している。<br>最終候補者を５人に絞り、コミッティで決定。勤務年数、現職との関わり方、ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ･ｽｷﾙ、態度、将来性などで採点し決定している。 | ・５年以上の勤務者で将来性のある人<br>・プロジェクトと関係の深い課からの推薦<br>・語学学習への適正のある人<br>・仕事ぶり、技術、年齢等で決定<br>・語学教育研修センター（外務省のみ）の基準で選考 |

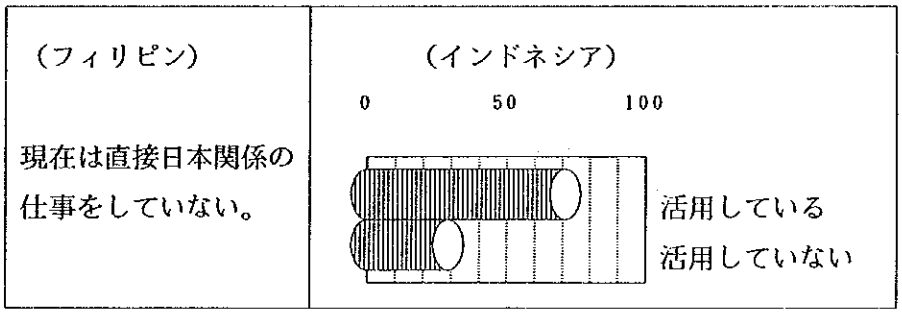
フィリピンのＮＥＤＡでは、点数制の評価基準方法を確立しており、コミッティにかけて選考するという、より厳密な方法をとっている。それに比べてインドネシアでは上司の判断で選考され、その後内閣大臣官房で最終的に選考される。フィリピンに比べると評価基準や方法の体系化はまだ整っていないとの印象を受けた。

4．コースの期間



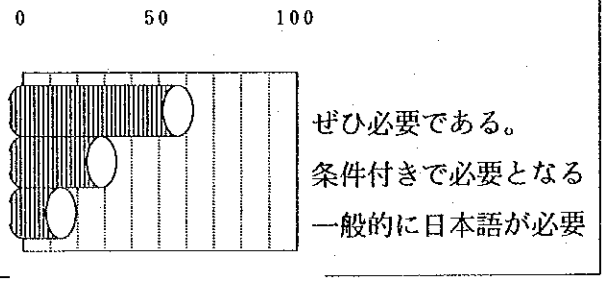

語学学習ということを考えると８カ月は少ないが、六ヵ月というのが所属機関としては研修に出せるぎりぎりのところだ、というところがやはり多かった。

5．職場での日本語の活用度



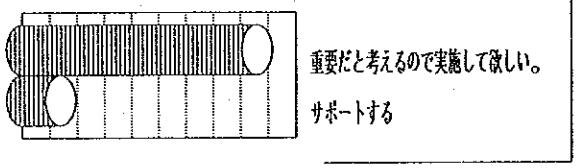

インドネシアの場合、活用場面として、(1)インドネシア語も英語も出来ない専門家とコミュニケーションを図るため日本語を使う、(2)会議などで使う、(3)日本語教師として日本へ研修に行く職員を教えている、(4)公共団体の人が来た時に使う（外務省）、(5)日本からの留学生が来た場合に使う（教育文化省）というのが目立った。全体の３分の２が日本語を活用していることになる。

6．今後の日本語研修の必要性

| （フィリピン） | （インドネシア） |
|---|---|
| フィリピンには割当が来なくなったが、今後各コースに一人づつは　必要である |  |

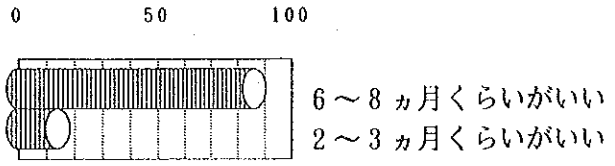
新しいプロジェクトが入れば必要となるような農業省作物保護局や中級レベルの研修があれば必要となるというセベストなどが条件付きで必要となる箇所で、一般的に外交官としてレベルの高い語学力が必要となるというのが外務省の意見であった。必要か不必要かという二者択一になると訪問全省が日本語を必要と考えているということも言える。又フィリピンは必要であるということではあったが、具体的な必要内容などはっきりしておらず差し迫った必要性はないものと判断された。

7．再研修に関して

| （フィリピン） | （インドネシア） |
|---|---|
| 必要があるかどうかもう少し時間をかけて検討したい。 |  |

再研修に関しては、プロジェクトの終了した農業省を除く全省が必要であるという意見である。また、非常に重要だと考えていることがわかった。しかしフィリピンは今の所必要性はそれほど高くないという風にも考えられた。

8．再研修の期間としては

| (フィリピン) | (インドネシア) |
|---|---|
| 検討したい |  |

再研修の機関はやはり、六ヵ月～八ヵ月くらいが適当のようであり、それ以上になると仕事に支障をきたすというのが所属機関の現状のようである。

9．要望

(フィリピン)

・各コースに一人割り当ててほしい

(インドネシア)

・割当数を年間6～7人にしてほしい
・アプリケーションを必要な所へ回してほしい
・通信教育等で継続して指導してほしい
・教材（ｶｾｯﾄ、ﾋﾞﾃﾞｵ、辞書類など）を送ってほしい
・日本語の教え方を教えてほしい
・インドネシアでも研修を実施してほしい
・中・上級レベルの日本語を教えてほしい
・ＪＳＰをもっと増やしてほしい
・研修機関をもっと長くしてほしい
・観光郵電省や大学関係でも研修の要望がある

## 3．4インドネシア各省における比較

1．割当数の妥当性　　(妥当性・・・もっと必要■　必要だと思う▲　今はない×)

| インドネシア各省名 | コメント内容 | 妥当性 |
|---|---|---|
| 工業省国際協力局 | 少ない。1コース1名ではなく2・3名受け入れてほしい。 | ■ |
| 農業省作物保護局 | ノーコメント | × |
| 農業省作物総局 | 少ない。もっとチャンスが欲しい。 | ■ |
| 外務省 | 1省から1人の割当を継続してほしい。 | ▲ |
| 内閣大臣官房 | 同省の中だけでも希望者が多いので、もっと割当がほしい。 | ■ |
| 教育文化省 | 現在の割当数は充分ではない。 | ■ |
| セベスト | 一人は欲しい。 | ▲ |

2．日本語専修コースの期間の妥当性　　（妥当な期間・・・八ヵ月■　六ヵ月▲　三ヵ月△）

| インドネシア各省名 | コメント内容 | 妥当な期間 |
|---|---|---|
| 工業省国際協力局 | 六ヵ月以内がいい。 | ▲ |
| 農業省作物保護局 | 八ヵ月がきつい。六ヵ月がいい。 | ▲ |
| 農業省作物総局 | 八ヵ月でも職場は何とかなる。研修は仕事の一環と考える。 | ■ |
| 外務省 | 八ヵ月は長すぎる。三ヵ月くらいがいい。 | △ |
| 内閣大臣官房 | 仕事として八ヵ月は長すぎるが、言語習得には短すぎる。 | ▲ |
| 教育文化省 | 八ヵ月は少し問題。六ヵ月が適当。 | ▲ |
| セベスト | ノーコメント | |

3．職場での日本語の活用度
（活用度・・高い■　まあまあ▲　必要性が高いが活用できない△　今はまったく使わない×）

| インドネシア各省名 | コメント内容 | 活用度 |
|---|---|---|
| 工業省国際協力局 | 職員のための日本語教師になって欲しいが、現在のレベルでは無理。 | △ |
| 農業省作物保護局 | 会議などで、又専門家と日本語を使ったが、今はチャンスがない。 | × |
| 農業省作物総局 | 日本語を職員に教えている。専門家とフィールドで使う。 | ■ |
| 外務省 | 政府関係者が来た時などに今は使う程度だが、将来日本へ赴任すれば非常に必要となる。 | ▲ |
| 内閣大臣官房 | 日本政府関係者が毎年１００人程度来るので必要だが、現在のレベルでは無理。 | △ |
| 教育文化省 | 日本人留学生受入れに必要。だが、現在のレベルではむつかしい。 | △ |
| セベスト | 日本語教師として活躍。 | ■ |

4．今度の必要性　　（必要性・・・非常に必要■　必要だと思う▲　今はない×

| インドネシア各省名 | コメント内容 | 必要性 |
|---|---|---|
| 工業省国際協力局 | 公共団体や企業団体等のプロジェクト（造船）などがあり、英語やインドネシア語を話せない専門家もいるので日本語は必要である。 | ■ |
| 農業省作物保護局 | プロジェクト協力は２年前に終了したので、必要性は今後のプロジェクト導入の有無にかかっている。 | × |
| 農業省作物総局 | 今後益々日本語の技術協力は増える一方なので重要となる。 | ■ |
| 外務省 | 一般的に日本語は重要。教育研修センターでも日本語を重視している | ▲ |
| 内閣大臣官房 | 年間１００人の日本人専門家が来るし、２５０人のインドネシア公務員が同省を通して日本へ行くので日本語は重要。 | ■ |
| 教育文化省 | 年間１００人程度の日本からの留学生を受け入れるので、その世話で必要。 | ■ |
| セベスト | 専門家の世話をしたり、技術実習制度で日本へ行く職員に日本語を教える。 | ■ |

5．再研修の要望　　（要望の度合い・・非常に強い■　あれば出したい▲　特にない×

| インドネシア各省名 | コメント内容 | 必要性 |
|---|---|---|
| 工業省国際協力局 | 優先的にさせて欲しい。それ以外にもインドネシアに日本人講師が　来て教えて欲しい。 | ■ |
| 農業省作物保護局 | 研修があればサポートする。 | ▲ |
| 農業省作物総局 | 非常に賛成、是非実施して欲しい。 | ■ |
| 外務省 | この課では直接関係はないが、重要だと思う。 | ▲ |
| 内閣大臣官房 | 一人だけではなく複数の人にその機会を与えてほしい。 | ■ |
| 教育文化省 | 一人じゃなくて数を多くして欲しい。 | ■ |
| セベスト | 直接関係はないが、是非送りだしたい。 | ▲ |

6．再研修コースの研修内容への要望

| インドネシア各省名 | コメント内容 |
|---|---|
| 工業省国際協力局 | 専門家とのコミュニケーションのための専門用語、読み書きは要らない。 |
| 農業省作物保護局 | 専門技術用語 |
| 農業省作物総局 | 基本的知識から農業専門用語まで、総合日本語、通訳養成、読み書きも必要、教授法 |
| 外務省 | ノーコメント |
| 内閣大臣官房 | コンピューター管理分野の日本語 |
| 教育文化省 | 日本人留学生の就学許可やビザの世話で必要な日本語 |
| セベスト | 中級～上級レベルの日本語 |

## 3．5 まとめ

訪問した関係各省の意向をまとめてみると次のようになる。

1．インドネシア

①帰国研修員の日本語活用状況

帰国後の日本語の活用に関しては、これから日本で研修する職員のための日本語の講師になっている帰国研修員や、日本人専門家とのフィールドワークの時に日本語を使っている帰国研修員、日本人留学学生対象に日本語を使っている帰国研修員など（個人的に、観光専門学校などで教えている研修員もいる）がいて、帰国研修員の約３分の２が日本語を仕事で直接的または間接的に生かしているという結果である。

②割当数に関して

割当数に関しては、現状の割当では少なすぎるというのが、ほぼ９０％で、各コースに一人、もしくは２～３名、しかも各省から、という強い要望が工業省及び内閣大臣官房から出た。

③日本語研修期間に関して

日本語ＡＢ各コースの研修期間としては、所属機関としては８ヵ月は日本語の学習期間としては、むしろ短いかも知れないが、仕事上では八ヵ月は長すぎ、六ヵ月が望ましいというのが多かった。

④今後の必要性

今後の日本語の必要性としては、農業省作物保護局のようにプロジェクトが終了したので今現在日本語研修の必要性はないところもあったが、公共団体や企業団体のプロジェクト等１２名の日本人専門家などがいて非常に必要としているという工業省のようなところ、教育文化省のように日本人留学生の増加に伴い今後益々日本語が必要となる所などが目立った。

⑤再研修に関して

再研修に出すということでは、直接的に今日本語が必要ではなくても、再研修には出したいというのが訪問した全省庁の一致した要望であった。又、再研修には帰国研修員だけではなくて、他の人で同等の能力のある人材も受け入れて欲しいという意見もあった（内閣大臣官房）。又、再研修の期間として　は六ヵ月が最適であるというのが多数の意見であった。このように見てみると、日本語研修はだいたいのところが帰国研修員の職場で生かされていて、更に上級レベルの日本語が必要とされているということが言えるであろう。

２．フィリピン

帰国研修員が勤務する省としては、国家経済企画庁技術援助科上級奨学金支給科にしかいくことができず、その一機関を全体の関係省庁の意見とするわけにはいかないので、P.35～P.38のフィリピンの項を参照されたい。

# Ⅳ. 調査結果のまとめと提言

# Ⅳ. 調査結果のまとめと提言

## 4．1 帰国研修員追跡調査及び研修効果の調査

### 4.1.1 研修員の日本語の活用状況に関して

所属機関によっても、又プロジェクトの有無によっても多少異なるが、帰国研修員の日本語の活用状況は、日本人（関係省庁の公務員及び地方団体役員等）来庁の際の接待、専門家とフィールドでの話し合い、フレンドシップ・プログラムの世話、派遣前研修のサバイバル日本語の教授、等多岐に及んで生かされていることが確認された。又、公務員としての仕事上で生かされていない場合でも、個人的に観光学校で日本語を教えている人も数人確認された。

### 4.1.2 日本語能力の維持状況に関して

日本語能力の維持に関しては、個人差はあるものの、予想に反して当センターの日本語研修で培った日本語のスキルは後退しておらず、それなりにスキルが生かされているというのが全体的な印象であった。これはフィリピンよりもインドネシアの研修員により多く見られた現象であった。面談に臨んだ研修員がフィリピンは５人、インドネシアは２０人という参加人数の違いによるところもある。又、フィリピンでは英語でコミュニケーションが成立するということもそういう印象を抱くに至った要因と言えるであろう。当センターでの研修中に学習態度が良かった人は帰国後の能力の維持もできている人が多かった。しかし中には出来ない方のクラスに入っていた人が非常に伸びていたケースもあった。その場合の主な要因は研修中に抱いた日本への高い好感度が主な動機となっているようであった。

### 4.1.3 日本語の継続学習に関して

日本語の継続学習に関しても、インドネシアではJapan Foundation Center で学習している人も多く、日本語能力試験３級に挑戦して合格した人もいて、何らかの形で日本語学習を継続している人が目立った。全く継続学習をしていない人というのは調査上では皆無であった。

## 4．2 所属機関における調査

### 4.2.1 割当数に関して

日本語研修に関する意見としてはどの訪問機関でも、まず割当人数が少ないということであった（インドネシアの農業省作物保護局は、プロジェクトがもう終了したという

ことで例外であったが）。各省に少なくとも一人、できればもっと割り当てて欲しいという要望が強かった。

4.2.2 選考方法に関して

選考方法に関しては、インドネシアではセカブから各省にＧＩが送られが、送られてくるのに時間がかかり、その関係で募集期間が短くなり充分な選考が出来ない場合が多いということであった。又セカブの方で配布機関を調整してくるので、ほんとうに必要な省なのにもかかわらず（例えば教育文化省など）、ＧＩさえ回ってこないことがあるという意見もあり、セカブの選考方法にも問題があるようであった。

フィリピンのＮＥＤＡは、公正な選考基準を作成し、委員会を設置して選考に当たっているが、インドネシアの場合は、セカブから各省へ行き、上司の采配で候補者が決定されるという現状のようであった。

4.2.3 研修員の職場での日本語使用状況に関して

日本語の使用状況に関していえば、日本人専門家は最初はインドネシア語も英語もできない人が多いので帰国研修員の日本語が非常に役に立つという所（農業省総局）、年間約100 人の日本人留学生の対応をする教育文化省のようなところ、又他の職員のために日本語講師の役を勤めるところ等があり、当然のことながら日本語能力が高ければ高いほど日本語の活用チャンスは多いという意見が多かった。

## ４．３　再研修の要望調査

4.3.1 所属機関の要望

帰国研修員が職場で日本語を活用するチャンスは多いようであるが、機関としては、能力的にもっとレベルの高い日本語能力を有した人材を求めているというのが現状のようであり、そのためにも再研修には賛成で、支援をおしまないという所が多かった。しかし、やはり、一人だけではなく割当を複数にしてほしいという要望が強かった。インドネシアの工業省などではインドネシア特設コースを設けて欲しいという強い意見も出た。つまり出来るだけ高いレベルの日本語能力を有した要員ができるだけたくさん欲しいし、必要であるということであった。そして中上級レベルの一般日本語は言うに及ばず、専門分野の日本語をもっと必要としているということであった。機関として六ヵ月程度であるなら、再研修に出してもいいということであった。そして、帰国後、教えるチャンスが多いので教授法や教材の支援体制をなんとか作って欲しいという意見もあった。

4.3.2　帰国研修員の要望

帰国研修員は全員再研修を希望していて、その理由としてもっと能力が高ければ更に日本語の活用範囲が広がるというのが大半であった。再研修コースの学習内容の希望としては「会議の日本語」「ビジネス日本語」「電話の日本語」「専門分野の日本語」「敬語の使い方」を学習したいというのが主なものであった。これは日本人専門家の面談調査の結果とも一致するものである。

研修地としては沖縄でというのが多かったが研修期間の半分は日本本土のどこかでという意見もあった。期間としてはやはり習得するには六ヵ月くらいがいいというのが一番多く、次に2～3ヵ月というのが続いた。

## 4．4　背景調査

フィリピンとインドネシアの日本語学習熱は、調査団の想像をはるかに上まわるもので、学習者は今のところ増えつづける一方であるとのことであった。

特にインドネシアでは、全世界の日本語学習者数の第4位を占め（一位が韓国、二位が中国、三位がオーストラリア）、政府が中等教育機関で日本語を第2外国語の選択科目としてカリキュラムに取り入れ、国家レベルで広げる予定をしている。インドネシア政府の意気込みに並々ならぬものがあるようである。

フィリピンも国家レベルで日本語センターの設置を検討し始めているようであり、又大学、研修所、日本語学校レベルでは他言語をおさえて日本語が一番人気のある科目であるということであった。

両国とも国レベルにしろ、個人レベルにしろ日本とのこれからの関係に多くの人が多大な期待を寄せているという認識を改めて持った。日本の経済的発展と国際的地位の向上によるものとはいえ、日本語の地位が大きく変わり、日本語が主要媒介語の一つになりつつある（特にインドネシアで）のではないかという印象さえ抱いたが、それだけに問題点も山積みで、良質の日本語教師の不足や教材不足などが第一に上げられる現状のようであった。外国人に対して日本語の普及を推進するのは間違えば自国文化のおしつけになり、文化侵略という批判を受けかねないが、現在普及どころか、熱心な要望のまえに受け身でたたされていてその需要に応じきれないというのが実状ではないかという印象を受けた。

## 4．5　問題点及び今後の課題

訪問機関先での主な問題点や要望では、日本語研修の必要性が高いにもかかわらず割当数が少ないというのがまずトップの問題点であり、次に中・上級レベルの日本語の技術を持った人材が少ないということであった。要望もそれに準じて、割当数をもっと増やして欲しいという要望と再研修への積極的な参加要望であった。

又研修員側からの問題点としては、専門用語が分からないなど実力不足だと感じている研修員が多く、帰国後の日本語学習のファローをして欲しいという要望が多かった。例えば通信教育をするなり、教材の支援体制を整えるなり、継続学習のための手助けをして欲しいということであった。そういう問題を抱えているので、再研修への要望はフィリピン／インドネシア両国とも１００％であった。

今回の諸々の調査場面及びその結果を通して、日本語研修は必要性が非常に高く、又重要な意義を持つものであるとの認識を新たにした。ＪＩＣＡのソフト面の支援体制の一環としての日本語専修コースは、日本とフィリピン及びインドネシアの文化交流的架け橋となっているだけではなく、本来の目標である技術移転の場面においてその芽を出し始めていたというのが現場を見た調査団員の印象であった。しかし、更に、その芽が成長し、本格的に実を結ぶには、帰国後の研修員の継続学習の支援体制を整えることや再研修コースを実現していく等のケアーが必至であろう。日本語専修コースでの六～八ヵ月の期間で学習したことを生かし、更にそれを中、上級レベルにまで発展させることは、円滑な技術移転の際の人材育成という意味で、効率の高いものとなり得る。

又、割当数増加の熱心な要望に答えるべく、インドネシア特設コース設置の可能性も探っていきたいと考える。

今後の日本語専修コースでは、今回の調査の結果や現場の状況を研修内容に生かし更に高いニーズに答えるべく充実した内容のコースデザインを行っていきたいと考える。

# V. 資料

〔フィリピン〕

# 資料① 帰国研修員リスト（国別・年度順）

| | COUNTRY | NAME | ORGANIZATION | HOME ADDRESS | NO | DURATION | REMARKS |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | Philippines | Ms. Annie E. Geron | National. Manpower and Youth Council IVTD-OED East Service Road. South Super Highway Fortbonefacio. Taguig Metro Manila. Philippines | Block 13 Lot 3 Adelina Complex 1 Sanpedro Laguna Philippines TEL. 846-05-47 98-27-28 | 853090／850034 7 | 昭和60年6月6日～昭和60年12月16日 | |
| 2 | 〃 | Ms. Edith T. Diamony | オーストラリア大使館勤務 | 72 Matatag Street Diliman. Quezon City Philippines | 853190／8504205 | 昭和60年10月28日～昭和60年4月29日 | |
| 3 | 〃 | Ms. Priscilla S. Reyes | Telecom Training Institute Bureau of Telecom Ministry of Transport & Communication Bureau of Telecommuinications Karuhatan. Valenzuela Metro Manila Philippines | 51 T. De Leon. Karuhatan Valenzuela. Metro Manila Philippines TEL. 292-07-03 34-67-86 | 853190／8504206 | 〃 | |
| 4 | 〃 | Mr. Ramon Ynares Reyes | National Economic and Development Authority (neda) Special Committee on Scholorships. Amber Avenue. Pasik. Metro Manila. Philippines TEL. 6312164/6312165 | 402 Zulueta st. Binangonan. Rizal 3106 Philippines TEL. 652-0262 | 863190／8602936 | 昭和61年10月2日～昭和62年3月30日 | |
| 5 | 〃 | Ms. Lilia E. Samuray | Ministry of Labor and Employment Bureau of Labor Relations. Labor Organization Divi. Quezon City. Philippines | 48 Calumpit st., Project 7 Quezon City. Philippines | 863190／8603166 | 〃 | |
| 6 | 〃 | Ms. Lourdes P. Pernes | One-stop-action Center for Investments. Board of Investments MCC P.O. Box 676 Makati. Metro Manila Philippines TEL. 87-56-02/86-84-03 | No.4 7th Street Pacita Complex 1. San Pedro. Laguna Philippines TEL. 846-2443 | 873190／8703338 | 昭和62年10月1日～昭和63年5月31日 | |
| 7 | 〃 | Mr. Glenn Fortu Corpin | Nourtheast Asia Division. Office of Asian and Pacific Affairs. Department of Foregin Affairs 2330 Roxas Boulevard. Pasay. Metro Manila Philippines TEL. 834-3203 | 10-A Maginoo Street. Diliman Quezon City Metro Manila. Philippines | 923010／9205087 | 平成4年10月22日～昭和5年4月25日 | |

〔インドネシア〕

# 帰国研修員リスト　〈国別・年度順〉

| | COUNTRY | NAME | ORGANIZATION | HOME ADDRESS | NO | DURATION | REMARKS |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | Indonesia | Mr. I. Ketut Cakera | Ministry of Manpower Directorate for Programe Development and Private Training<br>JL. Gatot Subroto. Kav 50-51. Jakarta Selatan. Indonesia | JL. Kramat Asem Raya Pto 18/12 Utankayu Jakarta Timur. Indonesia | 853090／<br>8500693 | 昭和60年6月6日～<br>昭和60年12月16日 | |
| 2 | 〃 | Mr. Suprijad Danu Suwignjo | Ministry of Manpower Directorate General of Manpower Development & Placement<br>JL. Jend Gatot Subroto Kav 51. Jakarta Selatan. Indonesia | Komi Blk Jakarta Cijantunc Pasar Rebo Jakarta Timur. Indonesia | 853090／<br>8500782 | 〃 | |
| 3 | 〃 | Ms. Ira Dewanti Israwan | Sub Directorate of Pest Control. Directorate of Food Crop Protection<br>JL. Aup. Pasar Minggu. Jakarta Selatan Indonesia | JL. Ragunan-Pasar Minggu. Jakarta Selatan. Indonesia | 853190／<br>8504254 | 昭和60年10月28日～<br>昭和61年4月29日 | |
| 4 | 〃 | Ms. Cahyaniati | Directortate of Food Crop Protection<br>JL. Aup. P.O. Box 7236 Jakarta. 12072 Indonesia | Beji Permai F7 Tansh Baru. DEPOK 16426 | 853190／<br>8504255 | 〃 | |
| 5 | 〃 | Mr. Eddie Pradjanto | Ministry of Manpower<br>JL. Gatot Subroto Kav. 51 Jakarta Selatan -jakarta. Jakarta. Indonesia | JL. Duyung A. 3616 Jurang Mango Timur Pondoic Aren- Tangerang 15222 | 863090／<br>8506062 | 昭和61年4月3日～<br>昭和61年9月30日 | |
| 6 | 〃 | Ms. Sri Indarti | Department of Manpower<br>JL. Gatoto Subroto Kav. 51 Jakarta Selatan-jakarta. Jakarta. Indonesia<br>TEL. 513966 | JL. Bogor Lama No. 17 Jakarta-Selatan<br>TEL. 831160 | 863090／<br>8506063 | 〃 | |
| 7 | 〃 | Mr. Banbang Turyono | Ministry of Public Works<br>Foreign Aid Administration. JL. Patimura No. 20. Jakarta. Indonesia | Kompleks Puri Kartika Blok DC No. 11. Cileduk P.O. Box 519 Kby. Jakarta. 12001. Indonesai | 863190／<br>8603572 | 昭和61年10月2日～<br>昭和62年3月30日 | |
| 8 | 〃 | Mr. Joko Priyono | Direktorat Perlindungan Tanaman Pangan<br>Pest Control. JL. Aup Pasarminggu. Jakarta Selatan. Bogor. Indonesia | JL. Jati Indah II-25B Pangkalan Jati Sawangan Bogor | 863190／<br>8603656 | 〃 | |

〔インドネシア〕

# 帰国研修員リスト（国別・年度順）

| | COUNTRY | NAME | ORGANIZATION | HOME ADDRESS | NO | DURATION | REMARKS |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9 | Indonesia | Ms. Utami Andayani | Ministry of Agriculture<br>JL. Aup Pasar Minggu Jakarta Selatan Indonesia. Jakarta. Indonesia | JL. Sampit 1 No. 58 Kebayoran Baru Jakarta Selatan | 863190／<br>8603657 | 昭和61年10月2日～<br>昭和62年3月30日 | |
| 10 | 〃 | Ms. Utarmi | Sub Division for Bilateral Cooperation. Department of Manpower Bureau of Planning Relations<br>JL. Gatot Subroto Kav 51. Jakarta<br>TEL. 512338 | Pura Pekayon Indah Blok C IV No. 8<br>KL. Pekayon Jaya Kec. Bekasi Selatan<br>Bekasi, Jawa Barat. Indonesia | 873090／<br>8606104 | 昭和62年4月2日～<br>昭和62年9月28日 | |
| 11 | 〃 | Mr. Andy Jaya Dermawan | Ministry of Agriculture. Bureau of International Cooperation<br>JL. Harsono Rm No. 3. Ragunan. Jakarta Indonesia<br>TEL. 7804176 FAX. 7804367 | JL. Karang Pola VI/7. Pasar Minggu. Jakarta Selatan. Indonesai | 873190／<br>8702398 | 昭和62年10月1日～<br>昭和63年5月31日 | |
| 12 | 〃 | Ms. Ellen Elvinardewi | Pesticide Evaluation Section. Ministry of Agriculture. Directorate of Food Crop Protection<br>JL. Aup. P.O. Box 7236. Jakarta. 12072 Indonesia | JL. Kayumanis VD/195(Lama)<br>Jakarta 13110. Indonesia | 873190／<br>8703318 | 〃 | |
| 13 | 〃 | Ms. Kartika | Ministry of Manpower Bureau of Legal Affairs and International Cooperation<br>JL. Gatot Subroto Kav. 51. Jakarta. Indonesia | Komplex Balai Latihan Kerja Departemen Tenaga Kerja Block 1/6. Rebo Cijantung Jakarta. Indonesia | 883090／<br>8706310 | 昭和63年4月7日～<br>昭和63年10月3日 | |
| 14 | 〃 | Mr. Edi Tugiono | Vocational Training Centre-CEVEST<br>JL. Guntur Raya. No. 1<br>Bekasi-Indonesia | Complex CEVEST<br>JL. Guntur Raya No. 1<br>Bekasi 17144 Indoesia | | | |
| 15 | 〃 | Mr. Dadeng Gunawan | Ministry of Agriculture Bureau of International Cooperation<br>JL. Harsono Rm. 3. Ragunan Pasar Minggu. Jakarta. Indonesia<br>TEL. 7804176 | JL. Kampus Unkris. No 8. Jatiwaringin. Jakarta-Timur Jakarta. Indonesia | 883190／<br>8802104 | 昭和63年9月29日～<br>平成元年5月29日 | |
| 16 | 〃 | Mr. Siswanto Mulyaman | Directorate of Food Crop Protection. Directorate General of Food Crop Agriculture<br>JL. Ahli Usaha Perikanan Pasarminggu. Jakarta. Jakarta. 12520. Indonesia | Gang Gaya RT 009/01 No. 30<br>Kelurahan Pasar Minggu Jakarta-Selatan<br>Jakarta. Indonesia | 893010／<br>8806280 | 平成元年4月6日～<br>平成元年10月21日 | |

# 帰国研修員リスト（国別・年度順）

| | COUNTRY | NAME | ORGANIZATION | HOME ADDRESS | NO | DURATION | REMARKS |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 〃 | Mr. Abdul Munir Oesman | Regional Cooperation Divisions. Bureau of International Relations. Ministry of Industry<br>Kav 52-53. JL. Gatot Subroto. Jakarta. 12001. Indonesia | JL. Serut No.7 Jakarta 13210<br>TEL. 4716344 | 893010／8806355 | 〃 | |
| 18 | Indonesia | Ms. Hatmawati Ugelta | Agriculture Department Directorate of Food Crop Protection<br>JL. Aup Ragunan ps Minggu. Jakarta Indonesia | JL. Ancol Barat 6A/100. Bandung Indonesai | 893020／8903549 | 平成元年9月28日～平成2年5月28日 | |
| 19 | 〃 | Ms. Yunani | Protocol & Telecommunication Devision. Ministry of Agriculture<br>3 Harsono RM Street Ragunan South Jakarta Jakarta. Indonesia | JL. Menteng Pvlo IX/18 RS008/07 Tebet-Jakarta 12870 | 893020／8903547 | 〃 | |
| 20 | 〃 | Ms. Ratih Dewanti | Bereau for International Cooperation. Department Education and Culture<br>JL. Jendral Sudirmam Senayan. Jakarta Indonesia<br>TEL. 5738181 | JL. Taman Pendidikan IV/144 Komplek Depdik Bvd. Cilandak Jakarta Selatan | 903010／8907207 | 平成2年4月12日～平成2年10月8日 | |
| 21 | 〃 | Ms. Iriana Trimurty Ryacudu | Foreign Cooperation Division. Bureau of Public Relations and Foreign Cooperation Ministry of Trade<br>JL. M. I. Ridwan Rais No.5. Jakarta Indonesia | JL. Musyawarah No.33 Kelapa Dua-Kebon Jeruk Jakarta Barat | 903010／8907091 | 〃 | |
| 22 | 〃 | Mr. Riris Marhadi | Division of Bilateral Cooperation. Bureau of International Relations. Ministry of Industry<br>JL. Gatot Subroto Kav. 52-53. Jakarta-Selapan. Indonesia | JL. Platina No.6 Bumi Satria Kencana Kali Malang. Bekasi Selatan Indonesia | 903010／8907241 | 〃 | |
| 23 | 〃 | Mr. Arie Mustafa | Bilateral Division. Bureau for Tchnical Cooperation. Cabinet Secretariat-State Secretariat<br>JL. Veteran 18. Jakarta. Jakarta Pusat Indonesia<br>TEL. 384118 | JL. Prapanca Raya Komplek CPM No.15 Kebayoran Baru Jakarta Selatan<br>TEL. 711376 | 903020／9004558 | 平成2年9月27日～平成3年5月27日 | |
| 24 | 〃 | Ms. Dinariani Dwi Sriwijayanti | Secretariat for Head Bureau. Secretariat Generate. Education and Culture<br>JL. Jemderal Sudirman Senayan. Jakarta-Selatan. Indonesia 5731844<br>TEL. 5731844 | Perumahan Larangan Indah JL. Larinda Raya Barat Blok D/9 Cileduk-Tanggerang | 903020／9004793 | 〃 | |

〔インドネシア〕

# 帰国研修員リスト（国別・年度順）

| | COUNTRY | NAME | ORGANIZATION | HOME ADDRESS | NO | DURATION | REMARKS |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 25 | 〃 | Mr. Viviarini | Administrative Division, Indonesa Export Training Center, Ministry of Trade JL. Letjen s Parman Grogol, Jakarta, Daerah Khusus Istimewa Jakrta | JL. Zeta VI 359 Cimone Permai Tangerang- Jawa Barat Indonesia<br>TEL. (021)-5666732<br>5674229 | 923010／<br>9204857 | 平成4年10月22日～<br>平成5年4月25日 | |
| 26 | Indonesia | Ms. Cut Aisyah Ali | Bilateral Cooperation Division, Bureau for International Cooperation, Ministry of Industry<br>JL. Gatot Subroto, No. 52-53, Jakarta Selatan, Bogor, West Jawa, Indonesia | Complex Ministry of Industry Bloc A/23 JL. Perindustrian Cimanggis-Boggor | 923020／<br>9204299 | 平成4年9月24日～<br>平成5年5月24日 | |
| 27 | 〃 | Mr. Mochamad Abas Ridwan | Section of Communication Services, Directorate for Technical Cooperation and Economic Serv, Directorate General of Foreign Economic Relation, Department of For-reign Affaires<br>JL. Pejambon Number 6, Jakarta 10110, Dki Jakarta, Indonesia<br>TEL.(021)363991 | JL. Cempaka Putih Barat Ⅱ/7 Jakarta Pusat 10520 Indonesia<br>TEL. (021)4253826 | 923020／<br>9204080 | 〃 | |

# 資料② 研修員勤務先リスト

〔フィリピン〕

| | | |
|---|---|---|
| 1 | アニー | National, Manpower and Youth Council<br><br>East Service Road, South Super Highway<br>Fortbonefacio, Taguig<br>Metro Manila, Philippines |
| 2 | エディッツ | オーストラリア大使館勤務 |
| 3 | プリシラ | Telecom Training Institute Bureau of Telecom Ministry of Transport & Communication<br>Bureau of Telecommuinications Karuhatan, Valenzuela Metro Manila, Philippines<br><br>運輸通信省研修課 |
| 4 | ラモン | National Economic and Development Authority (neda)<br><br>Special Committee on Scholorships, Amber Avenue Pagis Metro Manila, Philippines<br><br>国家経済企画庁技術援助課上級奨学金支給課 |
| 5 | サムライ | Ministry of Labor and Employment<br><br>Bureau of Labor Relations, Labor Organization Divi, Quezon City, Philippines<br><br>労働雇用省労働関係局 |
| 6 | ルル | One-stop-action Center fdr Investments, Board of Investments<br><br>Mcc P.O. Box 676 makati, Metro Manila<br><br>投資庁メディア専門家 |
| 7 | グレン | Nourtheast Asia Division, Office of Asian and Pacific Affairs, Department of Foregin Affairs<br>2330 Roxas Boulevard, Pasay, Metro Manila Philippines<br><br>外務省アジア太平洋関係局北東アジア部 |

# 研修員勤務先リスト

〔インドネシア〕

| | | |
|---|---|---|
| 1 | ケタット<br>エディ<br>インダルディ | Ministry of Manpower Directorate for Programe Development and Private Training<br>JL. Gatot Subroto, Kav 50-51, Jakarta Selatan, Indonesia<br>労働省　セベスト　プロジェクト |
| 2 | エスプリヤント | Ministry of Manpower Directorate General of Manpower Development & Placement<br>JL. Jend Gatot Subroto Kav 51, Jakarta Selatan, Indonesia<br>労働省 |
| 3 | アミー<br>イカ | Sub Division for Bilateral Cooperation, Department of Manpower Bureau of Public Relations<br>Bureau of Public Relations, JL. Gatot Subroto Kav 51, Jakarta<br>労働省広報局二国間協力 |
| 4 | ムニール<br>リリス<br>チュ | Bilateral Cooperation Divisions, Bureau of International Relations, Ministry of Industry<br>Kav 52-53, JL. Gatot Subroto, Jakarta, 12001, Indonesia<br>工業省国際 |
| 5 | イラ | Sub Directorate of Pest Control, Directorate of Food Crop Protection<br>JL. Aup. Pasar Minggu, Jakarta Selatan Indonesia<br>農業作物害虫駆除課 |
| 6 | ウタミ | Direktorat Perlindungan Tanaman Pangan<br>Pest Control, JL. Aup Pasarminggu, Jakarta Selatan, Bogor, Indonesia<br>農業省作物部殺虫課 |
| 7 | ヤニ | Directortate of Food Crop Protection<br>JL. Aup, P.O. Box 36, Jakarta, Indonesia<br>農業省作物保護課 |
| 8 | エレン | Pesticide Evaluation Section, Ministry of Agriculture Directorate of Food Crop Protection<br>JL. Aup, P.O. Box 36, Jakarta, Indonesia<br>農業省作物保護局農業部農業評価課 |
| 9 | アンディ<br>ダデン | Director General of Food Crop, Ministry of Agriculture Bureau of Fereign Cooperation<br>JL. Harsoho Rm No.3, Ragunan, Jakarta Indonesia<br>農業省作物総局 |
| 10 | バンバン | Ministry of Public Works<br>Foreign Aid Administration, JL. Patimura No. 20, Jakarta, Indonesia<br>公共事業省水産資源開発部 |
| 11 | シスワント、<br>ジョコプリオノ<br>ウゲルタ | Directorate of Food Crop Protection, Directorate General of Food Crop Agriculture<br>JL. Ahli Usaha Perikanan Pasarminggu, Jakarta, Jakarta, 12520, indonesia<br>農業省作物保護課 |
| 12 | ユナニ | Protocol & Telecommunication Devision, Ministry of Agriculture<br>3 Harsono RM Street Ragunan South Jakarta Jakarta, Indonesia<br>農業省 |
| 13 | ラティ | Bereau for International Cooperation, Department Education and Culture<br>JL. Jendral Sudirmam Senayan, Jakarta Indonesia<br>教育文化省 |
| 14 | イリアナ | Foreign Cooperation Division, Bureau of Public Relations and Foreign Cooperation Ministry of Trade<br>JL. M. I. Ridwan Rais No.5, Jakarta Indonesia<br>教育文化省 |
| 15 | アリ | Bilateral Division, Bureau for Tchnical Cooperation, Cabinet Secretariat-State Secretariat<br>JL. Veteran 18, Jakarta, Jakarta Pusat Indonesia<br>内閣大臣官房 |
| 16 | ディナ | Secretariat for Head Bureau, Secretariat Generate, Education and Culture<br>JL. Jemderal Sudirman Senayan, Jakarta-Selatan, Indonesia<br>教育文化省国際協力局 |
| 17 | フィフィ | Administrative Division, Indonesa Export Training Center, Ministry of Trade<br>JL. Letjen s Parman Grogol, Jakarta, Daerah Khusus Istimewa Jakrta<br>商業省貿易研修センター |
| 18 | リドゥワン | Section of Communication Services, Directorate for Technical Cooperation and Economic Serv, Directorate General of Foreign Economic Relation, Department of For-reign Affaires<br>L. Pejambon Number 6, Jakarta 10110, Dki Jakarta, Indonesia<br>外務省 |

日本語専修コース

# 資料③ 帰国研修員へのアンケート

（日本語研修及び帰国後の日本語運用に関する調査）

QBUSTIONNAIRE FOR EX—PARTICIPANTS

(Survey on the application of Japanese language after the return to countries and on the Japanese Language training)

国際協力事業団
沖縄国際センター

国名(country)＿＿＿＿＿＿ 研修員名(name)＿＿＿＿＿＿＿＿ 年齢(age)＿＿＿＿＿＿

コース名(name of the course)＿＿＿＿＿＿ 研修年(year of the training)＿＿＿＿＿＿

現職 (Present job) ＿＿＿＿＿＿＿＿ (Present position)＿＿＿＿＿＿＿＿

研修前に学習した外国語＿＿＿＿＿＿＿＿
Foreign language you have studied before your training in Japan
帰国後に学習した外国語＿＿＿＿＿＿＿＿
Foreign language you have studied after your training in Japan

1．沖縄での日本語研修について(About the training in the Japanese Language course in Okinawa)

a．研修全体について(On whole training)

| | 質問(questions) | Indicate on a scale of 1 to 5. | 理由及びコメント(Reasons and comments) |
|---|---|---|---|
| ① | この研修コースはあなたにとって役立つものでしたか。<br>Was this course useful to you? | 1 2 3 4 5<br>useless ⟷ very useful | |
| ② | 研修コースへの参加はあなたの仕事に影響しましたか。<br>Did the training you received have any influence on your job? | 1 2 3 4 5<br>not influenced ⟷ much influenced | |
| ③ | この研修で得たことはあなたの仕事に関連していますか。<br>What have you acquired directly related tdo your job? | 1 2 3 4 5<br>not related ⟷ much related | |
| ④ | カリキュラムやシラバスは適切でしたか。<br>Were the curriculum and syllabus appropriate? | 1 2 3 4 5<br>not appropriate ⟷ appropriate | |
| ⑤ | コースのレベルは適当でしたか。<br>Was the level of the course appdropriate to you? | 1 2 3 4 5<br>not appropriate ⟷ appropriate | |
| ⑥ | 研修内容はわかりやすかったですか。<br>Was it easy to understand the content of the training? | 1 2 3 4 5<br>not easy ⟷ easy | |
| ⑦ | 研修期間は適当でしたか。<br>Was the training period appropriate? | 1 2 3 4 5<br>not appropriate ⟷ appropriate | |
| ⑧ | 沖縄は研修場所として適当でしたか。<br>Was Okinawa an appropriate place for the training? | 1 2 3 4 5<br>not appropriate ⟷ appropriate | |

| | 質問(questions) | Indicate on a scale of 1 to 5. | 理由及びコメント(Reasons and comments) |
|---|---|---|---|
| ⑨ | 応募資格用件は適当でしたか。<br>Were the items of qualifications to apply for the course appropriate? | 1 2 3 4 5<br>not appropriate ⟷ appropriate | |
| ⑩ | 日本語室の設備は役にたちましたか。<br>Were the facilities of the Japanese Language Room useful to you? | 1 2 3 4 5<br>useless ⟷ useful | |
| ⑪ | 指導は適切でしたか。<br>Was the teaching appropriate? | 1 2 3 4 5<br>not appropriate ⟷ appropriate | |
| ⑫ | 使用教材は適切でしたか。<br>Were the teaching materials appropriate? | 1 2 3 4 5<br>not appropriate ⟷ appropriate | |
| ⑬ | あとで最も役にたったこと<br>What were the things you studied that were most helpful to you upon your return? | | |
| ⑭ | もっと研修しておきたかったこと<br>What were the things you wanted to have more training in? | | |

b. 次の特別活動は日本語の研修に役にたちましたか（今、どう思いますか。）
Did the activities below help you to acquire Japanese Language Skill?

| | 質問(questions) | | 理由及びコメント(Reasons and comments) |
|---|---|---|---|
| ① | サバイバル　トレーニング<br>Survival training | 1 2 3 4 5<br>not helpful ⟷ very helpful | |
| ② | ワープロ<br>Word processing | 1 2 3 4 5<br>not helpful ⟷ very helpful | |
| ③ | 和紙人形制作<br>Making a Japanese paper doll | 1 2 3 4 5<br>not helpful ⟷ very helpful | |
| ④ | スピーチコンテスト<br>Speech contest | 1 2 3 4 5<br>not helpful ⟷ very helpful | |
| ⑤ | 日本事情Things about Japan(history, geography, etc.) | 1 2 3 4 5<br>not helpful ⟷ very helpful | |
| ⑥ | 研修旅行<br>Training trips | not helpful ⟷ very helpful | |
| ⑦ | プロジェクト　ワーク<br>Project work | 1 2 3 4 5<br>not helpful ⟷ very helpful | |

2．帰国後の日本語使用状況 about using Japanese after your return

| | 質問(questions) | 回答 (answers) |
|---|---|---|
| ① | だれと日本語を話しますか。<br>Who do you speak Japanese with? | |
| ② | どんな場面や状況で日本語を話しますか。<br>In what kind of situations do you speak? | |
| ③ | 会話の内容はどんなものですか。<br>What are the content of the conversation? | |
| ④ | 日本語の本や文献や新聞などを読みますか。<br>Do you read Japanese books, newspapers, etc? | |
| ⑤ | 日本語で書く機会がありますか。<br>あるとすればどんな機会に。<br>Do you have chances to write in Japanese? | |

3．帰国後の日本語学習状況 about studying Japanese after your return

| | | circle the appropriate ones | |
|---|---|---|---|
| ① | 継続学習<br>continuation of study | している( I'm continuing)<br>していない( I'm not.) | していないと答えた人は，何か継続学習に障害がありますか<br>If you answered no, is there anything that prevents you from doing so? |
| ② | 学習場所<br>place of studying | 自宅(at home )<br>学校(school) (　　)<br>その他(others) (　　) | |
| ③ | 学習状況<br>the way of studying | 独習( self-study) (　　人) ( _____people)<br>グループ(group study)<br>個人教授( private lesson)<br>その他 (others) 〔　　〕 | |
| ④ | 使用教材<br>using materials | テキスト text (　　) (　　) (　　)<br>テープ tapes (　　) (　　) (　　)<br>その他 others (　　) (　　) (　　) | |
| ⑤ | 学習頻度<br>frequency | 週に[　　] 日 ([　　]times a week )<br>一回に[　　] 時間 ([　　] hours per lesson ) | |
| ⑥ | 学習項目<br>items of studying | 文法 (grammar)<br>読解 (reading)<br>会話[ 話す／聴く](conversation[speaking/listening]) | |
| ⑦ | 今、どんな勉強がもっと必要だと思っていますか。<br>What kind of study do you need the most right now? | | |

4．日本語学習の本国での有益度及び必要性 usefulness and necessity of studying Japanese in your country

| | | Circle the most appropriate answers | 理由 (reasons) |
|---|---|---|---|
| ① | 日本語が 今<br>Japanese is now | 役にたっている (useful and helping me)<br>役に立っていない(not useful to me)<br>わからない(I don't know) | |
| ② | 現在、日本語が<br>At present, I need more Japanese language skills. | 必要だ(necessary)<br>必要ではない(not necessary)<br>わからない(I don't know) | |

5．日本語能力の自己評価　self-evaluation of language ability

| | 日本での研修期間中 (in Japan) | 帰国後 (in your country) |
|---|---|---|
| ① | 挨拶や自己紹介<br>greetings and self-introduction<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 | 挨拶や自己紹介<br>greetings and self-introduction<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 |
| ② | 食事の注文<br>ordering foods<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 | 食事の注文<br>ordering foods<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 |
| ③ | 買い物<br>shopping<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 | 買い物<br>shopping<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 |
| ④ | バスに乗る<br>riding busses<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 | バスに乗る<br>riding busses<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 |
| ⑤ | 道をきく<br>asking for directions<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 | 道をきく<br>asking for directions<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 |
| ⑥ | 電話<br>telephoning<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 | 電話<br>telephoning<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 |
| ⑦ | 銀行や郵便局で<br>in banks or post offices<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 | 銀行や郵便局で<br>in banks or post offices<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 |
| ⑧ | 日本人の家族を尋ねる<br>visiting Japanese friends<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 | 日本人の家族を尋ねる<br>visiting Japanese friends<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 |
| ⑨ | 病院へ行き、医者と話す<br>going to the hospital and consulting a doctor<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 | 病院へ行き、医者と話す<br>going to the hospital and consulting a doctor<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 |
| ⑩ | 丁寧な表現ができる<br>being able to use polite expressions<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 | 丁寧な表現ができる<br>being able to use polite expressions<br>0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 |

| | 日本での研修期間中 (in Japan) | 帰国後 (in your country) |
|---|---|---|
| ⑪ | 日本語の看板を読む<br>reading Japanese signs | 日本語の看板を読む<br>reading Japanese signs |
| ⑫ | 日本人との会話での聞く力は<br>listening ability in conversation with Japanese people | 日本人との会話での聞く力は<br>listening ability in conversation with Japanese people |
| ⑬ | 日本人との会話での話す力は<br>speaking ability in conversation with Japanese people | 日本人との会話での話す力は<br>speaking ability in conversation with Japanese people |
| ⑭ | 手紙やレポートを書く<br>writing letters, reports and etc. | 手紙やレポートを書く<br>writing letters, reports and etc. |
| ⑮ | ラジオやテレビのニュースがわかる<br>being able to understand the news on TV and radio | ラジオやテレビのニュースがわかる<br>being able to understand the news on TV and radio |
| ⑯ | 自分の考えを正確に伝える（意見を述べる）<br>expressing your opinion | 自分の考えを正確に伝える（意見を述べる）<br>expressing your opinion |
| ⑰ | ひらがな　カタカナ<br>reading and writing of hiragana and katakana | ひらがな　カタカナ<br>reading and writing of hiragana and katakana |
| ⑱ | 漢字の読み<br>reading of Chines characters | 漢字の読み<br>reading of Chines characters |
| ⑲ | 漢字を書く<br>writing of Chinese characters | 漢字を書く<br>writing of Chinese characters |
| ⑳ | 新聞の記事が読める<br>reading Japanese newspapers | 新聞の記事が読める<br>reading Japanese newspapers |
| ㉑ | 文法の知識<br>knowlege of Japanese grammar | 文法の知識<br>knowlege of Japanese grammar |
| ㉒ | 学習意欲<br>How strong was your desire to learn Japanese before you went to Japan? | 学習意欲<br>How strong was your desire to learn Japanese before you went to Japan? |

6．再研修（re-training）

| | 質問(questions) | 回答（answers） | |
|---|---|---|---|
| ① | いま再研修が可能であれば応募したいか。<br>Do you have an intention of applying for re-training? | はい Yes　　いいえ No | |
| ② | その理由は<br>What is the reason for it? | | |
| ③ | 再研修ではどんなことを勉強したいか<br><br>In the re-training, what do you want study? | (You can choose as many as you like.) | |
| | | | ラジオやテレビのニュース( news on TV or radio, |
| | | | 新聞( newspapers) |
| | | | 日本事情(Japanese affairs) |
| | | | スピーチ |
| | | | 会議(meeting) |
| | | | 討論(debate) |
| | | | 講義の日本語(Japanese for lectures) |
| | | | 職場の日本語(business Japanese) |
| | | | 通訳(translation) |
| | | | 漢字(Chinese character) |
| | | | 手紙やレポート(letters and report) |
| | | | 中上級レベルの一般日本語(General Japanese; intermediate and upper level.) |
| | | others | |
| 7 ④ | 研修の長さはどのぐらいがいいか。<br>How long would you like to study? | | |

．今後の希望学習内容（contents of the re-training programe which you wish to study）

| | | |
|---|---|---|
| | 日本語を学習していく上で、今後どんな援助をＪＩＣＡに期待しますか。<br>どんなファローアップが必要だと思いますか。<br><br>What (kind)of support do you expect from JICA in order to continue to study Japanese? And what kind of follow-up do you think is necessary? | |

8．その他の意見（Any comments and suggestions for JICA's Japanese Language Course would be highly appreciated.）

| |
|---|
| |

# 資料④　研修員へのインタビュー

研修員名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿年齢＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

現住所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

現職＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

| | 質問 | メモ |
|---|---|---|
| 募集～帰国後の仕事～所属機関のニーズ | 選考上の問題があるか。 | |
| | 帰国後、異動等で仕事の内容に変化があったか。 | |
| | 研修参加で昇進等に影響があったか。どのように。 | |
| | 研修参加の成果をどのように報告したか。（レポート・口頭発表／上司に報告・同僚に／内容は／他） | |
| | あなたの機関から研修員受入れを続ける必要があるか。<br>その理由は。 | |
| | 所属機関が現在直面している主要な問題は何か。 | |
| コース終了後 | 何らかの方法で日本語動向に関して知ることができるか。（雑誌・ラジオ・テレビ・日本人専門家との交流・研修・視察・他） | |
| | 現在でも日本の関連機関と接触があるか。（Kenshuin誌・プロジェクトのＪＩＣＡ専門家との接触・コースの講師の方との連絡）<br><br>同コースの研修員と今でもつながりがあるか。 | |
| 再研修 | 短期間の再研修についてどう思うか。 | |
| | 今度はどんなことを主に学習したいか。（どんな形態で） | |
| | 研修地／研修期間は | |
| | 自国で出張講師による再研修コースというのはどうか。 | |

| | |
|---|---|
| F. up | ＪＩＣＡのファローアップ活動全体に対する要望が何かあるか。 |
| その他 | |

# 資料⑤　訪問機関先でのインタビュー（日本人専門家か上司）

訪問機関＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

所在地　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

勤務施設（環境）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

| | 質問　　メモ |
|---|---|
| 割当～募集～選考 | 割当数は妥当かどうか。 |
| | 募集期間は短くないか。 |
| | 選考上の問題があるか。 |
| | 研修員選考課程について<br>技術協力窓口機関<br>ＧＩの配布先<br>応募者選考基準（過程・考慮点・報奨など）<br>日本側への要望（単発的／継続的受入計画等への要望）<br>どうやって貴課で人選をしているか。 |
| 機関でのニーズ | あなたの機関から研修員受入れを続ける必要があるか。<br>その理由は。 |
| | 所属機関が現在直面している主要な問題は何か。 |
| 研修終了後 | 帰国後、異動等で仕事の内容に変化があるか。 |
| | 研修参加で昇進等に影響があるか。どのように。 |
| | 研修参加の成果をどのように報告する義務があるか。 |
| | コースの期間は所属機関としてどう思うか。 |

| | |
|---|---|
| コースに関して | 最も役に立っていると思われることは。 |
| | もっとやって来てほしかった点は。 |
| 再研修 | 再研修についてどう思うか。 |
| | 今度はどんなことを主に学習してきてほしいか。 |
| | 期間はどのぐらい／研修地はどこが適当だと思うか。 |
| F. up | ＪＩＣＡのファローアップ活動全体に対する要望が何かあるか。 |
| その他 | |

# 資料⑥　研修員へのインタビュー調査結果

| | | フィリピン | | インドネシア | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 質問 | NEDA（1人） | その他（4人） | 工業省　（3人） | 農業省①　（2人） | 農業省②　（3人） | 外務省　（1人） | セカワ　（1人） | 教育文化省　（2人） | ヤペスト　（1人） | その他　（7人） |
| 仕事 | 帰国前と帰国後の変化 | 文部省の奨学金のプログラムの担当になった（昇進した。） | 仕事の変更あり。<br>昇進あり。 | 同じ | 同じ | 同じ　2人<br>課が変わった　1人<br>（1人昇進） | 同じ | 同じ<br>（1ランク昇進） | 同じ　1人<br>変わった　1人 | 同じ | 同じ　6人<br>変わった　1人 |
| 仕事 | 必要性 | NEDA全体にとって必要。 | 必要<br>・割当が少ない。(ｸﾞﾚﾝ) | 必要<br>日本人専門家数人いる。 | 必要 | 必要<br>日本との関係がある。 | 必要<br>外交官として必要。 | 必要<br>専門家によく会う。 | ・とても必要。<br>日本人が毎年100 人位来る部署で働いていて通訳を頼む程必要。(ﾗﾃｨ)<br>・日本人の専門家がたまに来る。仕事に関する話しをする。(ﾃﾞｨﾅ) | 必要 | 必要と感じている　4人<br>不明　1人<br>不必要　1人 |
| 日本語の使用状況 | 仕事上又は政府関係 | ・JICAの専門家と話す機会がある。<br>・仕事上の質疑応答が多い。 | ・日本人が速く話した時は問題。（アニー）<br>・日本の中小企業の人とのコミュニケーションが難しい。日本で話すが、専門用語が分からない。（ルル） | 日本人とは日本語と英語とインドネシア語を混ぜて話す。日本語の使用状況に関しては人により違う。 | ・専門用語がわからないのが問題。 | ・JICA関係の訪問者と会う機会がある。(ﾀﾞﾃﾝ)<br>・専門の事がわからない | ・大使館やJICAの人と話す。<br>・話す相手がいないのが問題。 | ・時々日本語を話す。70% 日本語20% 英語10% イ語10% 。<br>・JICAの専門家と話しをする。 | | ・今年日本語を３００時間位教えた。<br>・漢字が分からないのが問題。 | ・専門家（白鳥さん，本多さん）と一緒にいた(ｽﾌﾘ)(ｴﾃﾞｨ ﾌﾞﾗｼｬﾉ)<br>・帰国したらプロジェクトが終わっていた。労働省）<br>・専門家には会う機会がない。<br>・秘書大学で日本語を教えている。(ｴﾃﾞｨ ﾌﾞﾗｼｬﾉ, ｲﾝﾀﾞﾙﾃｨ, ｱﾐ)<br>・JFC のplacement test を受けたが、漢字で躓いた。(ﾘｱ)<br>・JFC の試験を受ける(ｱﾐ<br>・労働省でも勉強している。(ｽﾌﾘ)<br>・「Kenshuin 」が２年間送られてきた。 |
| 日本語の使用状況 | 個人的 | 市役所の人（日本人）やフィリピン人の友人と話す。 | | ・日本人と接触する機会が多いが日本人はインドネシア語を話したがる。<br>・日本語は20%~80% の使用率 | ・プライベートで日本へ留学したい学生に教えている。（ヤニ） | ・手紙は日本語で書く。日本人にインドネシア語を教えている。(ﾕﾅﾆ) | ・日本人の友人と連絡をとったりする。 | ・日本へ研修に行く人に簡単な日本語を教えている。 | ・日本人の学生にｲﾝﾄﾞﾈｼｱ語を教えている。<br>・日本語でホストファミリーに手紙を書いたりする。 | ・日本人の専門家と休み時間に話しをする。 | |
| 学習状況 | 現在の学習状況 | 「Kenshuin 」がまだ来る。「Look Japan」も読む。日本語のＴＶ番組が以前はあった。 | ・10月に日本へ行くかも(ｸﾞﾚﾝ)<br>・JICAのテキストを読んだり子供たちに教えたりしている。(ｱﾆｰ) | 自習，10月からJFC<br>・JICAからの情報 | ・自習，交流基金，能力検定試験３級（ヤニ）<br>・JFC で学習した。（エレン）<br>・新聞とかテレビで知る。<br>・大使館で資料がもらえる。 | ・自分で勉強している。友人に教えている。 | ・できるだけ日本人の友人やカウンターパートと日本語で話すようにしている。 | ・日本文化センターへ行く。（ 週２回）<br>・「Kenshuin 」や「Look Japan」がある<br>・大使館から雑誌をもらう。 | ・カセットを時々聴く。<br>・日本の雑誌をときどき読む。 | ・自習している。<br>・「Kenshuin 」も送られてこなかった。<br>・JICAの教科書を読む。 | |
| 再研修 | 再研修 | 良い | 良い | 良い | 良い | 良い | 良い | 良い | 良い | 良い | 良い(6人) 必要ない(1人) |
| 再研修 | 希望学習内容 | 事務所の会話 | ・ビジネス日本語(ﾙﾙ)(ﾌﾘｼﾗ)<br>・外交官の日本語(ｸﾞﾚﾝ)<br>・労働省のようなところで研修したい。<br>・実地訓練がしたい。 | ・読み，書き，文法<br>総合日本語（技術用語は少々）（ムニール）<br>・ﾎﾞｷｬﾌｧce・会議の日本語（リリス）<br>・文法，聴解，事務所・会議の日本語（チュー） | ・実験のレポートを日本語でよみたい。（ヤニ）<br>・農薬など農業関係の日本語を勉強したい。（エレン） | ・教授法，通訳(ﾀﾞﾃﾝ)<br>・通訳(ｱﾝﾃﾞｨ)<br>・農業・食糧穀物の日本語(ﾕﾅﾆ) | ・会議の方法，スピーチ<br>敬語 | ・日常会話，一般日本語<br>・事務所の日本語，電話の日本語 | ・会話のみ。一般日本語がいい。(ﾗﾃｨ)<br>・レポートの読み方，書き方，公式文書(ﾃﾞｨﾅ) | 技術の日本語を学習したい。 | ・観光・秘書・経営関係の日本語(ｴﾃﾞｨ ﾌﾞﾗｼｬﾉ)<br>・文法，翻訳，会話(ｲﾝﾀﾞﾙﾃｨ)<br>・文学，法律，一般(ﾘｱ)<br>・翻訳，作文(ｱﾐ)<br>・会話，一般日本語(ﾌｨﾌｨ |
| 再研修 | 研修地／研修期間 | 沖縄がいい。勉強に向いている。 | 2～3ヵ月<br>日本の方がいい。 | ・7~8ｶ月（ムニール）<br>・１年でも（リリス）<br>・日本の方がいい | 日本で６ヵ月。<br>沖縄でもいい。(ｴﾚﾝ) | 日本の方がいい。 | 日本で６ヵ月 | 本州で１年日本語を勉強したい。 | ・沖縄で３ヵ月(ﾗﾃｨ)<br>・７ヵ月，沖縄で半分(ﾃﾞｨﾅ) | 日本で６ヵ月 | 日本の方がいい。 |
| その他 | 要請 | テープや日常会話・文法書などを送って欲しい。(ﾗﾓﾝ) | ・テープ等を送って欲しい。(ﾙﾙ)<br>・日本語ジャーナルは参考になる。(ｸﾞﾚﾝ)<br>・日本語を教えたいので上級レベルの日本語を学習したい。(ｸﾞﾚﾝ) | ・沖縄がいい。(ﾑﾆｰﾙ)<br>・宿題を送って欲しい。<br>・通信教育があったらいい。<br>・ワープロがあったらいい。 | ・Open University のようなものがあったほうがいい。 | ・同窓会に援助して欲しい。 | ・JICA,OICから雑誌が欲しい。 | ・再研修をして欲しい。<br>・交流のプログラムを実施して欲しい。 | ・練習問題を出して欲しい。(ﾃﾞｨﾅ)<br>・同じコースの研修員の動向が知りたい。(ﾃﾞｨﾅ)<br>・ホームスティをしたい(ﾗﾃｨ) | 日本語を教えているので設備が欲しい。 | ・１年の再研修がしたい(ｽﾌﾘ) |

# 資料⑦ 訪問機関先での調査 （フィリピン）

| | |
|---|---|
| 訪問機関 | 国家経済企画庁技術援助科上級奨学金支給科<br>（National Economic and Development Authority : NEDA） |
| 面談者 | Ms. Aurora T. Collanties (Desk Officer) |
| 聞き取り人数 | １人 |
| 割当数 | 各コースに一人はほしい |
| 募集期間 | 短い　４～５か月は欲しい |
| 選考過程 | ＪＩＣＡ⇨ＮＥＤＡ⇨ＡＧＥＮＣＹ |
| 選考基準 | 独自の選考基準を設定している<br>５人くらいに候補者を絞り、Committyを開く。<br>勤務年数、現職との関わり方や妥当性、及びコミュニケーション・スキルや態度、将来性などで採点し決定する |
| 昇進等への影響 | 他の要因もあるので特にない |
| コースの期間 | ちょうどいい |
| 日本語の活用度 | 直接日本関係の仕事を今はしていない。今はイタリア・フィンランドの担当になった。 |
| 今後の必要性 | 各コースに一人はほしい |
| 再研修に関して | 必要があるか検討したい |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 訪問機関 | フィリピン貿易研修センター<br>Philippine Trade Training Center | 外務省外務研修所<br>Foreign Service Institute | 在フィリピン日本大使館広報文化センター付属日本語学校<br>Japan Information and Cultural Center |
| 面談者 | Ms. Angelina V. Angele (Bxecutive Director)<br>猪熊由里子（ 青年海外協力隊員・日本語教師） | Ms. Mary Geraldine C. Naraja (Desk Officer<br>吉村　卓（ 青年海外協力隊員・日本語教師） | 早坂　豊詮　　（ 一等書記官） |
| 歴史 | １９８９年研修所を開設<br>貿易実務に精通した人材の養成を目的とする。<br>商業日本語の研修センター | １９７９年研修所を開設<br>アラビア語、インドネシア語、フランス語、日本語、スペイン語、中国語、今現在日本語が一番ポピュラーな言語、次がフランス語 | ・１９６８年に開始<br>・フィリピンで一番レベルが高い。<br>・他の機関でレベルに合ったコースがない場合にここへよく来る。 |
| 学生数 | 全部で４０人<br>学生・・・・・・・・・・・１０％<br>公務員・・・・・・・・・・２０％<br>会社員及び経営者・・・・７０％ | １６８人、レベル１―６０人・Ｌ２―５８人<br>Ｌ３―１２人<br>女性の受講者が圧倒的に多い。<br>年齢は２３歳～５７歳くらいまで。<br>４４の事務所から来ている。<br>外務省が優先される。<br>（レベル１～５）１年に３学期・週２回３時間 | ・３００人ぐらい<br>・誰でも受入れるが、社会人が多い。<br>（特に中小企業の人が勉強している。） |
| レベル | １～ＩＶとグラジュエートコース<br>（１コース二ヵ月半）<br>週３回２時間づつ | | 初級３レベル／中級４レベル／上級１レベル（１０人程度）合計８レベル<br>一学期は五ヵ月（７～１２）（１～６）<br>全部終了するまでに３年かかる。 |
| 講師 | 青年海外協力隊の日本語教師以外には、大使館の講師が非常勤講師として教えている。<br>他に２人のフィリピン人の講師がいる。 | ＪＯＣＶの日本人教師は１２年間入っているフィリピン人講師 | 日本語講師は国際交流基金から派遣される。<br>フィリピン人の教師もいる。 |
| テキスト | ＪＩＣＡ専門家作成のオリジナル教科書 | レベル１～４は「日本語初歩」<br>上級は「日本語の基礎」 | |
| 学習の動機 | ・日本人経営の会社に勤めていて、生活レベルの日本語が必要という人。<br>・日本人とビジネスを始めたいと思っている人<br>・これから日本へ行きたいと思っている人<br>・大学で学んだ日本語を伸ばしたい人<br>・日本人の友達がいて、コミュニケーション能力を欲している人などがいる。 | ・証書が欲しい人<br>・省でやりたい人、又は時間に余裕のある人<br>・単なる知識として、教養として個人的に活用している。活用するのは日本語というよ日本に関心があるからということであり、目的はあとからついてくる。 | 日本語が出来るといい仕事、いい給料がもらえる。翻訳の仕事もある。 |
| 問題 | ＪＯＣＶを必ず来るものと思っているので、どこまでやって打ち切るかがむずかしい。 | ・日本語能力試験の受験者が少ない。<br>・大使館が中心になっている（フィリピン人で１８年も教えている人もいる）<br>・フィリピン側も日本側も英語で意志の疎通が出来るので、日本語はそれほどいらない | 教師不足だが、賃金が安いので民間では雇えない。 |
| 要望 | ビジネスコースへの希望者が多いので夜間のクラスをオープンしたい。<br><br>日本の文化紹介ビデオが欲しい。 | | |

# 訪問機関先での調査　（インドネシア）

| 訪問機関<br>(関係者)<br><br>面接者 | 工業省国際協力局（３人）<br>(Bureau of International Relations, Ministry of Industry)<br><br>Ms. Ainsjah Taufik(Head, Bureau for International Relations) | 農業省作物保護局（７人）<br>(Directorate of Food Crop Pro－tection, Ministry of Agriculture)<br>,<br>Mr. Muhamad Satta Wigenasantana Director of Food Crop Protectio n) | 農業省作物総局（３人）<br>(Directorate General of Food Crop, Bureau of Foreign Cooperation, Ministry of Agriculture)<br><br>Mr. Hidayat Gandaatmadija<br>大澤　慶幸 | 外務省　（１人）<br>(Directorate General of Foreign Economic Relation, Department of Foreign Affaires)<br><br>Mr. Herry Harjono (Director of Technical Cooperation & Econo mic Services) | 内閣大臣官房（１人）<br>(Bureau for Technical Cooperation Cabinet Secretariat of the Republic of Indonesia)<br><br>Mr. Husen Adiwisastra (Head of Bilateral Cooperation Division) | 教育文化省（２人）<br>(Division of America and Asia, Bureau for International Cooperation, Department of Education and Culture)<br>Mr. Mohamad Afieq(Head, Bureau for International Cooperation)<br>Mr. Mohamad Kodrat(Head, Divison of America and Asia | セベスト（３人）<br>Center for Vocational and Ex－tention Service Training (CEVEST) 職業訓練向上計画<br><br>内海　幸雄 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 割当数 | 少ない。もっと増やして欲しい。<br>１コース１名ではなく１省から２・３名受け入れて欲しい。 | ――― | 少ない。もっとチャンスが欲しい。 | １省から１人の割合を継続してほしい。 | 同省が外国からの援助関係での研修を担当・管理しているが、同省の中だけでもたくさんの希望者がいるのでもっと割合がほしい。各省庁から日本だけではなく、欧州や北欧などへ毎年50～60人が送りだされている | 充分ではない。 | 一人は欲しい。 |
| 募集期間 | ２ヵ月程度あるが、もっと時間が欲しい。 | ――― | 締め切りまでに時間がない。ｾｶﾌﾞから届くまでに1ｶﾊﾞかかることもある | ――― | | もっと長いほうがいい。 | ――― |
| 選考過程 | ――― | ――― | 応募者が多いが候補者を選び内閣大臣官房に書類提出し最終選考する。 | 内閣大臣官房からGIが送られて来るが直接こちらに来る場合もある。 | ――― | 一人の公募に３０人以上が申し込む | 内閣大臣官房で調整するので、ここにはもう来ない。 |
| 選考基準 | ５年以上の勤務者で仕事上で将来性のある人 | プロジェクトと関係の深い部署から推薦制度で選んだ。 | 語学学習への適性及び日本との関係の深いセクションの人々を対象。 | 外務省の中の教育研修センターの基準で選考、センターへ帰国後の報告も行う。 | 既に各省庁で選ばれてくるので、余り問題はない。他の国からのofferと天秤にかける時間問題が生じてくる | 仕事ぶり、技術、年齢等で決定 | 要望があれば出したい。 |
| 昇進等への影響 | 能力にもよるので特に保証の限りではない。 | 日本での研修とは直接関係ない。昇進には時間がかかる。 | 言語能力も１つの考慮点になっている。 | 直接の関係はない。 | ――― | 日本語能力も考慮点の一つ | 日本語研修と特に関係ない。 |
| コースの期間 | ６ヵ月以上だとポジションがなくなるため（給料の支給はある）六ヵ月以内がいい。 | スタッフとしては８ヵ月席をあけるのはぎりぎりのところ。だが語学学習には短いと思う。 | ８ヵ月は充分ではない。言語学習も仕事の一環　８ヵ月でも職場は何とかなる。 | ８ヵ月は長すぎる。３ヵ月くらいがいい。 | 仕事としては長いが、言語を実際に使えるようになるには短すぎる。 | ８ヵ月は少し問題 | ――― |
| 職場での日本語の活用度 | 他の職員のために日本語講師になってもらいたいが、今の３人のレベルでは教えられない。 | インドネシア語（少なくとも初めのうちは）も英語も出来ない専門家が多いため、日本語が役に立つ。今はチャンスはないが、会議などでも使った。もっと話せるといい。 | 現在先生として短期間（８日間の集中講習）日本へ行く職員などを教えている専門家と一緒にフィールドワークに出かけることもある。 | 政府関係者が来た時に使うくらい。 | 日本語を使う機会はあるが（日本政府関係から年間100 人がくる）コミュニケーションや書類も全部英語なので日本語が余り行かされていない。フレンドシッププログラムで日本へ行く人と練習する程度。 | 日本からの留学生が来た場合、使うが、もっと高いレベルの日本語能力が必要。 | 初めてきた専門家の世話をすることもある。民間の技能実習制度で日本へ行く人対象に帰国研修員が教えている。時々ジャカルタ日本語センターや大学の日本人の先生が教えるが文法中心のため標準カリキュラムを作ってもらいダルマ、プルサダ大学や私立校先生や大学生が教えることもある。本多先生が在任中は本省出身の研修員がカリキュラム作成等をしていたこともあった。 |
| 今後の必要性 | 公共団体や企業団体等のプロジェクト（造船など）のため、１２名の専門家がいるが、英語を話せない人もいるためミスコミュニケーションが多い。更に日本語は必要である。 | プロジェクト協力は２年前に終了（12年間で551 のプロジェクトがあった　ハードとソフト両方で）新しいプロジェクトを期待している。必要性はそれ如何である。 | 疑う余地もない。今後益々日本との技術協力は増える一方なので重要となる。 | 一般的に日本語は重要な言語であり教育研修センターでも日本語を重要視している（英語のアップグレードが主で、他はオプション） | 年間100 人の日本人（専門家等）がくるし、250 人のインドネシア公務員が日本へ行くので今後も日本語は大変重要である。 | 年間１００人程度の日本からの留学生を受け入れる。就学許可やビザの世話をするので重要。 | |
| 再研修に関して | 優先的にさせて欲しい。日本人の先生にインドネシアへ来てほしい。<br>専門家とのコミュニケーションのため専門用語を教えてほしい。読み書きはほとんど要らない。 | 研修があればサポートするが、２～３カ月くらいがいい。<br>今後は技術専門用語などをもっと勉強してきてほしい。 | 非常に賛成、是非実施して欲しい。学習環境を考え、日本での研修が好ましい。　基本的知識から農業専門用語、総合日本語、通訳養成もしてほしい。（読み書きも必要） | この課では特に必要ないが、重要だと思う。もっと必要な課があるのではないか（外務省には30のDirectorate がある）。しかし同省から１人の割当を継続してほしい。 | 他の人にも日本語の基礎を勉強してきてほしいが、６ヵ月位が一番適当（それ以上でもいいが）。<br>コンピューター管理分野の専門分野の日本－ 語を勉強してきてほしい。 | いいと思うが、一人じゃなくてもっと多くしてほしい。この課だけではなく、他の課もあるので。毎年アプリケーションを出しているが受け入れられていない。<br>六ヵ月～七ヵ月が適当。 | 直接には関係ないが、是非送りだしたい。<br><br>今後は中級レベル～上級レベルを学習してきて欲しい。 |
| 全体的な要望及び問題 | 通信教育で継続して教えてほしい。<br>教材等（カセット、ビデオ・テープ、辞書類）を送ってほしい。<br>55歳定年を考慮して、30～40歳の人をもっと取ってほしい。<br>インドネシアでの研修を行ってほしい。(2回日本、 2回インドネシア) | 日本との協力や援助の可能性をもっと求めている。（通常プロジェクトができる前に１年の準備期間があるため必要な人を研修にだせる）<br>Asia Pacific Natural Agriculturel Network にも入っているので、今後更に日本や他アジア太平洋地域と密接な関連性が増えるであろう。 | 農業省から年間30人位が日本へ研修に行く。その前に日本語研修をして送り出したい。福井県(Japanese Agricultural Exchange Program)には10年間前から農村の青年が農業研修にいっている。又国際農業者交流協会を通して日本からも青年がやってくる。<br>教授法の支援をしてほしい（教材・テキスト等が必要）。 | 外交官として英語以外にもう一つ外国語を知っていなければならないので必要である。しかも上級レベルの日本語を話せる人が必要である。 | 候補者数はもっと増やす必要がある年間６～７人が現実的要望。<br>ＪＳＰをもっと増やしてほしい。<br>研修期間をもっと長くしてほしい。<br>観光郵電省でも要望がでている。<br>インドネシア大学文学部日本語科の教職員も日本での研修を希望している。 | 毎年日本人学生が増える一方なので日本語の技術が必要なので少なくとも一人か二人は毎年行かせてほしい<br><br>必要な所にアプリケーションが回って来ない。又出しても割当がないので何とかしてほしい。 | 期間は問題ないが、帰国後インドネシア政府がその人をどう使うかが問題。事務職員（研修員）を日本語の先生にするのでは彼の仕事が大変。専任の講師が必要。<br><br>沖縄国際センターでも個別研修員を受け入れてほしい。 |

資料⑧

# ◎収集資料リスト

1. フィリピン

1.1 「ASSESSMENT SHEET」：ＮＥＤＡ（国家経済企画庁）作成

1.2 「FOREIGN LANGUAGE PROGRAM」：外務省外務研修所作成

1.3 「第一回日本語劇合同発表会パンフ」：広報文化センター付属日本語学校発行

1.4 「The PHILJAFAN (Philippine-Japan Fellows Association)」Vol.XIV No.2 1985

1.5 「The PHILJAFAN (Philippine-Japan Fellows Association)」Vol.XV No.1 1986

1.6 「The PHILJAFAN (Philippine-Japan Fellows Association)」Vol.XVI No.1 1987

1.7 「The PHILJAFAN (Philippine-Japan Fellows Association)」Vol.XVII No.2 1987

1.8 「The PHILJAFAN (Philippine-Japan Fellows Association)」Vol.XVIII No.1 1988

1.9 「The PHILJAFAN (Philippine-Japan Fellows Association)」Vol.XIX No.1 1989

1.10 「The PHILJAFAN (Philippine-Japan Fellows Association)」Vol.XX No.1 1990

1.11 「The PHILJAFAN 25th Aniversary」

1.4～1.11：比・日本帰国研修員同窓会発行

2．インドネシア

2.1 「行政省庁組織図」：ＪＩＣＡインドネシア事務所発行

2.2 「CEVEST（職業訓練向上計画）プロジェクト概況」：ＣＥＶＥＳＴ発行

2.3 「インドネシアにおける日本語教育」

2.4 「ジャカルタ日本語センターニュース」

2.5 「BERITA PUSAT BAHASA JEPANG」

2.6 「PUSAT BAHASA JEPANG」

2.7 「PUSAT KEBUDAYAAN JEPANG」

2.3～2.7：国際交流基金ジャカルタ日本語センター発行